

保 育 子 育 て 研 究 所 年 報

2003年度

桜花学園名古屋キャンパス保育子育て研究所

—創刊号—



目 次

はしがき	2
------	---

I 保育子育て研究所の設立とその意義

保育子育て研究所が語る夢【神田英雄】	3
保育子育て研究所の2003年度事業の回顧	6

II 保育子育て研究所事業の成果と課題

子育てをいっしょに楽しく一子育て交流会から見えてきたことー【宍戸洋子】	10
新人保育者への支援と養成校の課題 保育セミナー実施の試み【田中義和】	21
子育てにおける親の不安・迷い・願い ～連続子育て講座を通して～【左口真朗】	26

III 現代の保育子育て研究の課題をさぐる

幼児期における読み書き習得と「援助」との関係を考える【松本博雄】	34
学校で「居づらさ」を感じている子ども達への支援 ～環境療法の視点からの取り組み～【森本美絵】	41

資料

1 保育子育て研究所規程	46
2 保育子育て研究所2003年度決算報告	48
3 保育子育て研究所の組織体制	50

はしがき

桜花学園名古屋キャンパスに保育子育て研究所が設置され、その1年目、2003年度の事業をもとにして、ここに研究所年報を発行することとなりました。

名古屋キャンパスは、名古屋短期大学保育科、英語コミュニケーション学科、現代教養学科の3学科と桜花学園大学保育学部保育学科の4年制大学1学科で構成されています。また、従来より名古屋短期大学付属幼稚園を擁するキャンパスとして運営されています。4年制保育学部は、短期大学保育科の歴史と伝統の上に、時代の要請に応えるため、新しく誕生しました。そして、保育子育て研究所を設置して、保育の教育・研究の総合キャンパスをめざすこととなりました。本文にふれられているように、この組織は、既存の教育研究組織の力を借りて出発したため、独自の組織体制を確立するに至っていません。もともと保育者養成機関としては、スタッフの面で余裕があるわけではなく、研究所事業は、現象的にはいわば新しい仕事として加わってきたものです。しかし、現代の保育子育て事情をみると、保育学科、保育科による保育者養成は、子どもの保育と並んで現代の子育て支援を不可欠の任務として負っています。この両面にわたる保育子育ての現代的課題を明らかにし、未来と現在の保育者養成、現職教育の質を向上させることは、保育系キャンパスのある大学の使命ともなってきました。保育子育て研究所は、こうした現代的な課題の要請に応えるひとつの組織的解答となるように発足しました。キャンパスにおいて、今後三位一体あるいは四位一体の形態で保育の理論と実践の両面、保育の教育と研究の両面を幅広く担う組織的協働主体が成長していけるよう、研究所がその一翼を担うことが期待されています。

今後の研究所の事業展開に関心を寄せていただき、多くの方々からのご意見、ご批判を得まして研究所の運営を進めて参りたいと関係者一同念願しております。

2004年8月

名古屋キャンパス保育子育て研究所

所長 左口眞朗

保育子育て研究所が語る夢

神田英雄

研究所が設立されて2年。人的、物質的な条件はまだまだ整備されていませんが、不十分ながら、それぞれの分野について一定の活動を行ってきました。本誌は年報の創刊号ですので、これまで行ってきたことにふれつつ、研究所を今後どう育てていくのかについて、夢を語ってみたいと思います。

以下で述べることは筆者の個人的な思いではありますが、研究所の活動に何らかの接点を持つたくさんの方にお伝えすることによって、みなさんの要望や希望をよせていただく触媒になればいいな、と考えています。

1. 保育子育て研究所の3つの活動分野と、

研究所設置の意図

保育子育て研究所は、大きく分けて、次の3つの活動分野を持っています。

① 保育者として働いている人たちへの支援

② 子育て中の父母への支援

③ 保育、子育てに関する調査・研究活動

①については、これまでのところ、「夏期保育研究セミナー」が対応しています。「夏期保育研究セミナー」は、昨年度第1回を実施し、今回が2回目になります。

昨年は、卒業後1～3年目までの若い保育者に参加対象を限定し、「実家への里帰り」のような側面を強めて実施しましたが、今年度からは本来の「セミナー」に立ち返り、だれでも自由に参加できる形態へと脱皮しました(卒業年度を問わないだけでなく、名短の卒業生以外の保育士にも門戸を開く。ただし案内は実務的な制約から5年目までの卒業生に限定して送付)。

②に対応して、子育て支援室を活用した「子育て

交流会」と、近隣のおかあさん向けの子育てセミナー「子育てする気持ちをするための連続講座」(2004年2月～3月)を実施してきました。「子育て交流会」は昨年度は月に1回でしたが、かなりの反響があり、2004年度は毎月4回へと回数を拡大しています。

③に関しては、愛知県現任保育士研修運営協議会の委託を受けて、調査研究「子どもの変化と保育、子育て」を行いました。結果は、財団法人・愛知公園協会 愛知県児童総合センター『子どもの変化と保育、子育て』(2003)にまとめられています。また、研究所会員によって、2003年度の発達心理学会でも報告されています。

3つの分野の活動は、個別に見るならばとくに目新しいことではなく、これまでもさまざまな機関で行われてきました。

①については、愛知県現任保育士研修運営協議会による研修、各市町村や社会福祉協議会による研修、保育諸団体や研究諸機関、出版社による研修など、たくさんの学びの機会があります。

②についても、各地の子育て支援センター、保育所、幼稚園、保健センター等々で行われる父母への支援は、年々強化されています。民間の子育て支援組織もあります。

③の研究活動は、日本保育学会を初めとする諸学会や研究諸団体によって、活発に繰り広げられています。

このように、3つの分野において、すでにたくさんの企画が行われていますし、桜花学園大学保育学部および名古屋短期大学保育科の教員の多くも、それらの企画に個人として参画しています。にもかかわらず、同じ事を行う機関として、桜花学園名古屋キャンパスに保育子育て研究所を新たに設置した意味は、どこにあるのでしょうか。

私は、大学という教育研究機関にこれら3つの分野がリンクすることによって、新しい可能性が開かれるのではないかと考えています。それは、「保育・子育ての実践」「大学における研究活動」「大学における教育活動」の3つが相互に結びついて、内容を高めていくことができるということです。実践と研究と大学教育の結合でひらかれる新しい可能性こそが、保育子育て研究所設置の意味であり、保育子育て研究所が抱く夢でもあります。

そこで、以下では、それぞれの結びつきを述べることで、「夢」の内容をイメージしたいと思います。

2. 実践と研究との結合

「夏期保育研究セミナー」は、講義形式と分科会形式の併用で行われています。講義は主として講師から参加者へのメッセージの伝達になりますが、分科会はそうではありません。参加者相互の伝達であり、参加者の職種からいえば、「①保育者→保育者」という伝達のほかに、「②大学教員→保育者」「③保育者→大学教員」という伝達とがあります。

①の方向は実践交流であり、他の保育者の経験

から自らの実践に生かすヒントを得る意味があります。②には、最新の研究成果を保育者が知るという意味があるでしょう。

ポイントは③です。「今、保育現場で何が問題になっているのか」「何を明らかにしてほしいのか」という問題意識を保育者が述べることによって、大学での研究活動の方向性やヒントを大学教員に伝えることができます。分科会において、大学教員はアドバイザーであるだけでなく、実践者から学ぶ学習者でもあります。セミナーで示された課題を自らの宿題として持ち帰り、1年の研究を経た上で翌年のセミナーで報告することができれば、実践の役に立つ、生きた研究を行うことができるでしょう。実践者は求めたことに対する研究成果を得ることができます。

子育て支援活動にも同様な意味があります。子育て交流会や子育て講演会は、参加されたおかあさん方から大学教員がナマの声を聞くチャンスであり、それを契機として、生きた研究を創造することができます。

もちろん、研究は何年もかかる活動ですから、1年程度で結論が出るはずありません。しかし、論文としてまとめるまでには行かなくても、途中経過を「セミナー」で報告し、実践者の意見を聞くことによって、実践者は途上の研究からヒントを得て実践に生かすことができるし、研究者はその後の研究の方向づけやヒントを実践者からもらえるはずです。

3. 実践と教育との結合

実践と教育の結合は、何よりも、授業内容が実践的な側面から向上していくことに示されるはずです。2で得られた研究成果を大学の授業に反映することによって、個々の授業の内容を今日の実践的課題によりいっそう即応させることができるでしょう。組織的には、各分科会で討議された論点を研究所の研究員会議で整理し、大学教育のカリキュラム構造の

改善や特別講義の創設に結びつけていくことも可能です。それは、トータルとしての大学の教育内容を年々点検し、「力量ある保育者養成」の内実を向上させ続けるための、重要な契機になるはずです。

学生の直接的な学習機会としても、保育子育て研究所の活動は機能します。

子育て支援活動に学生自身が参加することによって、子育て中のお母さん方の声に直接触れることができます。親と子のために役立つ保育者となるためには何が必要かを自覚する契機となり、より主体的な学習活動へと結実していくにちがいありません。

子育て交流会に参加したおかあさん方にとっても、「教育・学習」という観点からの可能性が見えてきます。昨年度末に保育子育て研究所は連続講座という形で学習の機会を提供しましたが、大学に設置されている研究所であるメリットを生かすならば、大学教育そのものへのお母さん方の参加が追求されてもよいはずです。制度的には「科目等履修生」という制度が別にありますが、「保育学科」「保育科」という特殊性に応じた新しい制度を模索してもよいでしょう。

4. 研究と教育との結合

研究と教育の結合の中心は、大学教員が自らの研究成果を教育の中に生かすことですが、それは保育子育て研究所が存在しなくてもおこなわれていることです。保育子育て研究所が存在することによる新しい可能性は、教育と研究が結合する現場に学生が立ち会うことができるということです。

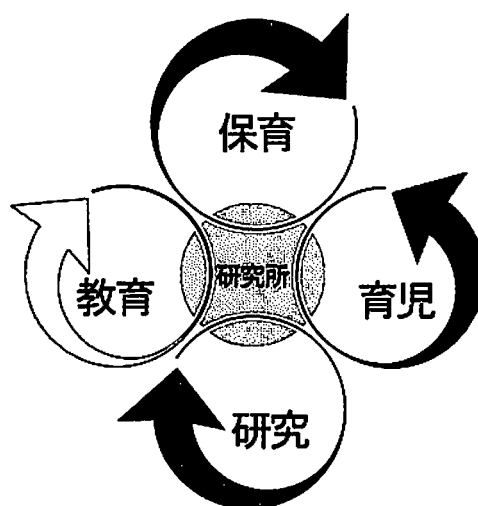
「夏期保育セミナー」に、オブザーバーという立場ではありますが、学生の参加が可能です。学生は「セミナー」で交わされる議論を聞き、浮かび上がった研究課題に大学の教員がどう取り組んでいくのかを知ることができるでしょう。そして、その成果を授

業等の形で提示されることになります。問題－研究－成果のサイクルの最初から、学生は立ち会うことができるわけです。生きた研究とはどのようなものを目の当たりにすることにほかなりません。

大学教員の研究を目の当たりにして自らの卒論としても取り組むことによって、大学教員の研究と自らの学びとを隣接する二つのコイルのように結びつけ、研究的学びのエネルギーを誘発させることができるはずです。



以上の結びつきを示したのが次の図です。



保育実践、子育て、大学教育、研究活動のそれぞれが相互に影響し合っとうまく回転していく接点に、保育子育て研究所が位置づきます。それぞれの分野が単独で回転し発展するだけではなく、接点を持つことによっていっそう内容豊かに発展していけるように、保育子育て研究所は創意ある活動を模索していきたいと思います。

保育子育て研究所の研究員は保育学部と保育科の教員ですが、研究員だけの意見ではなく、研究所の活動に接点を持つ全ての方の創意やアドバイスによって、いっそう内容のある活動主体として研究所を育てていきたいと思っています。どうぞ、さまざまなご意見をお寄せください。

保育子育て研究所の2003年度事業の回顧

保育子育て研究所

保育子育て研究所は、2002年10月に発足し、課題を確認し次年度事業計画を策定した。そして、2003年度から具体的事業を開始した。『名古屋短期大学における自己点検・評価2002年度』58頁にその発足の経緯と主要な業務、今後の課題を提示した。以下、そこで示した観点をふまえて、2003年度の事業を回顧していきたい。その際、それぞれの事業の評価ごとに、次なる課題にもふれていく。

1. 掲げられた研究所の設立理念と

業務に照らして

保育子育て研究所は、短大保育科と4年制保育学科が並立する名古屋キャンパスを、保育に関する研究・教育の総合キャンパスへと発展させる展望のもと、保育者として本キャンパスを巣立っていった卒業生たちをはじめ現役保育者たちの現職教育の機会を提供すること、地域における子育て支援事業や保育子育てに関する情報発信・交換をはかること、さらに、今日の保育の課題をめぐる共同研究の場としていくこと、などを目指して設立された。

2003年度事業に見られるように、この設立の趣旨は、その初歩的な一步を歩み出したと言える。

①研究所としての組織性・主体性

教授会承認を得た保育子育て研究所規程にもとづき、両学科より選出された4名の主任研究員を中心に事業計画とその実施が進められた。しかし、研究所の研究員はその性格上両学科の全専任教員と位置づけられている。したがって、事業計画の提案、具体的なプログラムの開始にあたって、合同学科会議にはかる手続きをとっている。また、適宜、教授会において事業の経過・結果報告を行っている。

②研究所としての自立性

研究所は、両学科を母体にして、所長を教授会

選出し、理事長任命の手続きを得ている。手当は無給である。主任研究員は、両学科において各種委員会委員として選出されており、教授会においては、他の全学委員会と同様、報告事項とされている。

事業内容に関しては、自立的・自治的に確定され実施されている。事業を左右する予算は、第1年度である2003年度は、170万円余が法人との事務折衝を通じて承認され、執行されてきた。

しかし、研究所を下支えする事務職員体制は未整備であり、事務アルバイト費が総額で400時間分計上されたにとどまり、本来求められる専任所長および専任職員の体制は今後の課題として残されている。

発足にあたって、こうした予算上の行方が明確でなかったためもあり、2003年度の予算を完全執行するには至らなかった。特に、事務アルバイトの採用は、11月段階から行われ、年度末2-3月期に実施された連続子育て講座における託児アルバイトの採用にも活用されたが、年度当初からの執行ができなかった。その間、所長が事務的な対応を多々とらざるをえなかった。

関連して、外部補助金の導入の可能性については、所長などの専任の体制による実績が求められており、当研究所事業を補助金事業としていくことは、将来の課題である。

2. 2003年度の事業の展開

当初掲げられた業務は7点である。

まず第1は、保育に関する調査研究である。この分野では、前年度の自己点検・評価において、委託研究の形ですぐに具体化されたが、2003年度においては、直接取り組まれたものはない。しかし、以下のそれぞれの事業の実施を通じていくつかの保育に関する情報や成果が得られつつあり、本年報に反映させている。

第2は、保育者養成に関する調査研究である。これについても、独自の調査研究プロジェクトを組むことはなかったが、以下に示す夏季保育セミナーを通して、若い保育者の意識と実態の一端をつかむ機会が得られた。これについても、本年報に一部反映されている。

第3に、子育て支援に関する調査研究である。今年度は、やはり独自の調査研究には取り組まれなかった。2004年度においては、短大保育科のゼミと連携して、豊明地域を対象にした研究プロジェクトが実験的に取り組まれる予定になっている。

第4は、子育て支援事業の実施である。これは具体的には、大きく二つの事業が実施された。

その一つは、5月から子育て支援室を利用した親子子育て交流会である。主任研究員穴戸洋子の担当で、5月、6月には月2回、8月を除いて以降は月1回のペースで火曜日10:00-11:00に実施された。主に、付属幼稚園に子どもを通園させている親とその第二子、第三子などを対象に、交流会の形で取り組まれた。名古屋キャンパスにとつての地域とは、まず付属幼稚園であるとの位置づけから、幼稚園の保護者とそのつながりをもとにして参加者が得られた。

参加者は、総計で親140名、子ども138名となった。その詳細な報告については、本年報穴戸報告を参照されたい。

本事業は、付属幼稚園が本来固有の子育て支援策として実施すべき性格をもつものであるが、現段階で実施されていない現状をふまえて、今後の付属幼稚園の在り方を展望していく手がかりとしての意義も有している。同時に、研究所としての子育て支援事業はいかにあるべきかについて、継続的に検討されている。それは、研究所自らが子育て支援事業を行うことはさまざまな点で制約をかかえていることと研究所の本来の使命は何かということにかかわっている。研究所は、その名にふさわしく、子育て支援に関しても研究的な提案や機会を提供することが本来の役割であるという議論がされている。その意味で、子育て交流会事業は、小規模ないわば「触媒」事業ないし「呼び水」事業という性格をもたせることがふさわしく、今後は、子育て支援者の養成や組織者の立場にある人たちへの支援を考えることが課題といえる。現在、2004年度には、これまでの子育て交流会と親たちによる自主的な子育て交流会の組織化を追求することが検討され計画されつつある。こうして、子育て交流会の在り方も一歩前進した姿を見せていく可能性が出てきた。

もう一つの事業は、2004年2-3月に開催された「子育てする気持ちを楽にするための連続講座」である。これについての報告も、本年報に掲載されている。

この事業も子育て支援事業として、付属幼稚園をはじめ近隣の地域の子育て期の親を対象とした連続講座である。

第1回「子どもの育ちを見通そう」

担当・神田英雄

第2回「子どもと楽しむ絵本」

担当・穴戸洋子

第3回「子どもと絵を楽しむ」

担当・田中義和

第4回「子どもの食生活を守る」

担当・小川雄二

第5回「みんなで子どもを育てるために」

担当・神田英雄

第5回は、当初参加者と講師全員でグループ別に話し合い形式で進める予定であったが、講師の都合により第1回の担当者が補足をかねてしめくくりの講義と参加者からの質疑・意見聴取の時間とした。

受講者数 受講申し込み者……最終的に41名

(担当者)	受講者数	託児数	アルバイト学生数
第1回(神田)	30名	17名	10名
第2回(穴戸)	33名	17名	10名
第3回(田中)	33名	19名	9名
第4回(小川)	28名	13名	11名
第5回(神田)	31名	16名	10名

第1回ははじめでは、保育科教員小西由利子が親子遊びを担当、託児では毎回保育科教員木村和子がチーフとなって進めた。各回とも、主任研究員ができるだけ現場にはりつき、受付では、所長と職員が対応した。

講座の評価は、参加者アンケートに示されている。(28名回答)

その結果は、受講してよかったか(5段階評価)には、「たいへんよかった」が21名、「よかった」が7名と、回答者の全員がよい評価を与えている。

キャンパスあげての地域との連携にはさまざまな企画事業が考えられるが、研究所は、保育の研究・教育の機能を生かす地域との連携を目指している。その意味で、子育て交流会と同様、この種の講座は、際限のない事業である。しかし、付属幼稚園のおかれたキャンパスにとって、付属幼稚園はもっとも身近な「地域」と言える。抽象的にとらえた地域ではなく、こうした付属幼稚園の親子を支

援するという形式と内容が、当の付属幼稚園との連携のもとに今後追求されていくことが課題となろう。その点で、研究所は、公開講座だけでなく、普段の保育・教育に関する授業それ自体を公開していくしくみも追求していきたいと考えている。

今回の連続講座で事務手続き上検討されるべきは、託児の体制とその条件である。定員50名、託児20名の枠で募集し、実際には受講者は各回平均30名程度、託児は16名程度であった。予定枠

を下回ったのは結果的に講座を無事終了させる上でよかったと言える。託児体制が教員をチーフとして学生アルバイトを各回はほぼ10名としたが、通常の園保育と違い、一人ずつ子どもに対応するケースが少なくなく、子どもの数はあまり大きくならないことが望ましいと思われた。また、子どもが親を求

めるときは、無理して引き離さず親元に帰すという対応をしたため、講義の進行を妨げるものではなかったが、気に障る受講者もいたようである。さらに、託児には、傷害保険への加入を求めたが、1回ごとの徴収で、しかも事前に申し込む必要から、事務的には煩瑣であった。無料講座のなかでの参加者負担であるが、申し込み時点での一括加入とするなど、今後手続きを工夫する必要があるとわかった。

第5は、公開講座、研究会などの開催である。上記のように、子育て支援事業では、連続公開講座を実施した。さらに、保育・子育てにかかわる研究会が求められているが、2003年度の事業の一つに、夏季保育研究セミナーがあげられる。これは、第2の保育者養成にかかわる取り組みとも重なるが、2003年8月30日、名古屋キャンパスを会場に、保育科の卒業生(この3年間)を対象に、若手保育者の悩みやとまどいに応え、元気の出る保育がで

きるよう、卒業生たちを励ます集いとして実施された。参加者は、200名余であった。分科会担当は、両学科の全教員に2名の非常勤講師の協力を得た。

午前に全体会（基調報告と記念講演）、午後に分科会の形で実施された。記念講演では、遊びの達人とされる旭川の学童保育指導員兼経営者の谷地元雄一氏が「保育をもっと楽しく面白く－ホロホロ風保育の味付けABC－」と題して行われた。

午後の分科会は、13に分かれて実施された。

2004年度以降は、卒業間もない若い保育者を励ます集いの性格を含みつつも、より保育の実践的な研究の場としてのセミナーへと移行していくことが確認されている。

研究所としての公開的な研究会の開催はもっとも社会的にその存在意義を示す重要な取り組みであるが、今までのところ、保育学の構築という大きな課題ともかかわって、提起するに至っていない。研究所としての役割や使命を体現するものとしての公開型の研究会は、さしあたりは、上記の保育研究セミナーの充実・発展に則しつつ展望していくことが現実的であろう。しかし、2004年度事業の検討と展開のなかで、あらためてそのあり方を追求していきたい。

第6は、研究所報などの刊行物の発行である。ここに創刊号を発行することができた。その内容は、2003年度事業の計画と実践をもとにして、提案型の諸報告、およびこれらに今日の保育研究や子育て支援の課題に寄せて、論文や研究報告を掲載している。

第7は、その他目的達成のために必要な事項である。特に独立した事業企画はないが、研究所事業の円滑な推進および発展のために、さまざまな条件整備が求められている。先にふれたように、予算上の条件整備は特に重要である。そのなかでも、

常勤職員の確保を実現させて、主任研究員をはじめとする研究所の活動が事務的な雑務に追われることなく、本来の業務に専念できる体制が望まれる。現在のところ、事務局において、教務課が研究所の事務の受け皿に位置づけられることが確認されているが、日常業務量からみて、この措置が適切なものであると俄に断言することはできない。

もう一つの条件整備課題は、子育て支援室の整備にかかわって、親子参加の企画に不可欠なトイレを用意することがあげられる。さらに、将来的には、7号館建設にかかわり、保育の研究・教育の総合キャンパスにふさわしく施設整備されていくことにより、この問題は一気に解決される問題とも言える。

全体として、保育子育て研究所の事業は、地域・社会との連携と同時に新たな学内的連携を求めている。この点で、保育系2学科の連携と統合的な力量を発揮するにはまだ十分余地がある。その可能性の追求がこれからの研究所の存在意義にかかわる大きな課題の一つでもあろう。

（文責・左口眞朗）

～4人滑ってもびくともしない頑丈なものです。木製の室内滑り台を市販で購入しようとしたら50万円以上もします。なによりもこの滑り台は、お金にはかえられない心のこもった手づくりのすばらしいものになりました。



また、図画工作の教員、浅野卓司の指導でみごとな猫バスのボールプールができあがりました。このほか、学生の手づくりの絵本、人形、輪投げ、布ボールなどたくさんのおもちゃが準備できました。

プレイルームの壁面は子どもたちの心が和むよう、3歳未満児の目線に合わせた位置に、やはり学生の制作によるかわいい作品が飾られました。そして、交流会室の入り口には、中に入りやすいよう、招き猫の置物を用意しました。

子育て交流会のスタート

保育子育て研究所を立ち上げたものの、研究所の専任の教員がいませんので実戸が交流会を担当し、月1回、1時間程度、2003年5月から実施することになりました。

交流会室の広さから、子どもたちがゆったり遊べ、母親どうしおしゃべりができるためには、親子10組ほどが適当であり、そのためには電話で申し込みをしてもらうことにし、交流会の趣旨とその活動内容を書き込んだチラシを作成しました。(資料1)

とりあえず、付属幼稚園の園児の未就園の弟、妹を対象にし、チラシは園から保護者に配布してもらうことにしました。

さて、どのくらいの申し込みがあるのでしょうか。電話の受付は、研究所長が授業の合間に当たりました。当初、電話が殺到するのではないかと心配しましたが、私たちの予想に反してなかなか電話のベルは鳴りません。

子育て交流会は、大学の行事や授業の関係から月1回だけ、その日も不特定です。その上、時間も10時から11時の1時間だけでは園児を園に送り届けて家に帰り、もう1度、交流会室に乳幼児を連れてくるということになり、たいへんです。幼い乳幼児を外に連れ出すのは、遠くては無理です。また、その日の体調、天候にも左右されます。

それでも、初回の申し込みは7組ありました。ところが、当日、熱を出したり、出かけにぐずったり、都合が悪くなったりし、第1回目は4組の親子で静かにゆったりスタートしました。

楽しい1時間を過ごしてもらうため、まず、交流会室にやってきた子どもたちにゾウ、ウサギ、クマ、パンダの動物の名札から気に入ったものを選んでもらいます。それから、おもちゃや遊具で遊びます。



やはり、滑り台、猫バスのボールプールは、子どもたちにとって魅力的なようで、ひとしきり遊びます。それから、ままごと遊びをしたり、積み木で遊びだ

します。なかには、なかなか母親から離れられない子どももありますが、少しずつ、家にはない珍しいおもちゃを手に取り、遊びだします。母親は、そんな子どもの様子を目で追いながら、お母さんどうし話をはじめます。そこに私も加わり母親の育児の悩みを聞いたり、体験を語ったりします。

40分ほど遊んだあと、片づけをし、お母さんが子どもを膝に抱いて輪になり、手遊びをしたり、絵本や紙芝居の読み聞かせをしたり、手品や人形劇を見せたりします。



回を重ねるたびに参加を楽しみにする親子、その参加者が新しい友だちを誘い徐々に人数が増えていき、2003年度は5月から3月まで12回の交流会で、延べ子ども138名、親140名、親子あわせて278名の参加がありました。(資料2)

交流会室の広さから、毎回、10組の親子の参加を目標にしましたが、多くて目の回るような日もありましたが、今年度は平均して10組の親子の参加がありました。

このほか、母親からの要望で、定例の交流会以外に10月に1回、母親による自主交流会が実施されました。日誌に、「とてもみんな和気あいあいとして遊べました。」「親同士の交流がはかれました。」「また、先生の話もたくさん聞きたいです。」と書かれていました。

子育ての悩みと、母親の感想

子どもを遊ばせながら、私も母親たちのなかに入り、子育ての悩みを話し合いましたが、参加のたびに、「出席カード」に子育ての悩みと感想を書いてもらいました。(資料3)

子育ての悩みは、子どもの甘え、兄弟関係、友だち関係、食事、排泄の自立についてなど、どの母親もほぼ共通していました。(資料4)

話し合いのなかで「みんな同じ悩みをもっているのね」「私だけではなかった」と、共感しあったり、「こんな工夫をしたら、にがてな野菜が食べられるようになったよ」「私の家では・・・」と、経験を交流しあったりし、帰りには母親たちの顔が明るくなり「また、来月、来ようね」と声をかけあったり、「こんど私の家に遊びに来てね」と約束しあう姿がみられるようになっていきました。

なかには子どもの不登園、不登校、友だちと遊べない、という深刻な悩み相談がありました。交流会が終わってから話し合ったり、別の日に来てもらったり、子どもが寝てから電話をしたり、何度も話しあうなかで、母親の気持ちが落ち着いていきました。こうした深刻な悩みは、ほとんど第1子の問題でした。

母親の感想は、「近くに友だちがなく、同世代の子どもとのかかわりがなかったので、ここで、思う存分遊べてよかった。」「親子共ここでお友達が出来、楽しく過ごせました。」と、親と子とそれぞれ友だちができたことの喜びが書かれていました。(資料5)

また、「手作りのおもちゃに感動しました。」「牛乳パックのアイデアにびっくりしました。」「おもちゃは、私も作ってみたなと思うほどすてきでした。」「家にはないおもちゃがたくさんあって楽しかったです。」「改めて、手づくりの良さを実感しました。」と、手づくりおもちゃ、遊具への賛辞がたくさんあり

ました。

「ただ遊ぶだけでなく、先生が見せてくれた人形劇やパネルシアターに子どもも私もくぎづけになりました。」「先生がしてくださった手品や手遊びを家でやってみたら、家じゅうのみんなが大喜びしました。」と、会の後半にする絵本や紙芝居、人形劇などを楽しみにする声も聞かれました。

子育ての話し合いについては、「みんなと話し合えてホッとしました。」「育児に自信がもてず、悩んでいましたが気持ちが楽になりました。」「先生に相談できたり、励ましていただいて、元気ができました。」と、書かれていて、1対1の育児相談でなくても、こうした井戸端会議的な交流会で、ほぼ母親の育児の悩みが解消されるのだということを改めて感じました。



今後の課題として、「1時間は、あっという間に過ぎてしまいます。もう少し長いと嬉しいです。」「もっと回数を増やしてほしいです。」「週1回あるとありがたいです。」という要望が書かれていました。これは、これからの大きな課題です。

「この交流会室のアットホームな感じがいいです。」「子どもたちの笑顔を見て勇気づけられました。」「子連れですが、なにかできることがあったらお手伝いします。」「会の名前をつけたらもっと親しみやすいと思います。『さくらんぼクラブ』なんて、どうでしょう。みんなで決めませんか?」という、うれ

しい提案に出会え、この1年、いいえ準備を含めてこの3年の苦労が実った喜びをかみしめています。

今後の課題

保育子育て研究所が発足し、子育て交流会が始まりましたが、研究所の専任の教職員がいないため、交流会も月1回の実施が精一杯でした。しかし、この子育て交流会も徐々に口コミで地域に広がり、2年目の第1回目は、35組というたくさんの親子の参加があり、部屋いっぱいの身動きのとれない状態になりました。実は、いつでも気楽に来られるようにと、年度の途中から電話の予約をなくしていたのです。これだけ多くの要求があることがわかり、うれしい悲鳴をあげたものの、この問題を早急に解決しなければいけません。

参加者からも、交流会の回数と時間の延長の声が高まってきました。そこで、母親たちにボランティアを募り、自主運営を呼びかけてみました。

うれしいことに17人のお母さんが協力してくれることになり、2004年度は6月から週に1度(第1・第3火曜日と第2・第4水曜日)、時間も30分延長し、9時半から11時まで実施することになりました。

しかし、ボランティアのお母さんたちは、ほとんど子ども連れです。なかには、数人、この交流会を巣立ち4月から幼稚園に入園した子どもの母親が、「少しでも、お役にたてたら」という、うれしい申し出がありましたが、それでも、母親だけにまかせることはできません。育児相談にのりながら、こうした母親たちの協力を得て、楽しい子育て交流会を企画、運営する専任の教職員の配置の実現が今後の大きな課題です。

今年度、交流会のなかでお互いの育児の悩みをだしあいましたが、話すことによって気持ちが楽になり、子育ての知恵を学びあうことができました。

今後もこうした子育て交流会の継続の必要性を痛感しました。

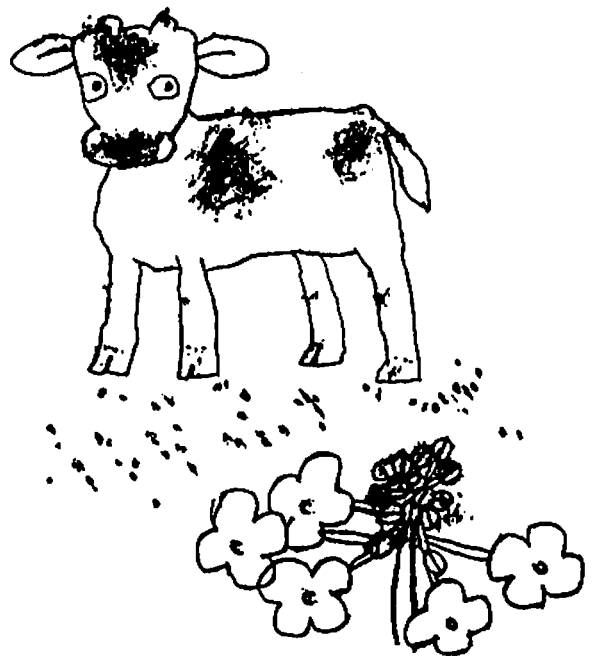
また、この交流会を通して名古屋市緑区の「子育てマップ」を作られた方や、豊明市の「子育てサークル」の方々、子どもたちに読み聞かせをしている方、地域で子育て支援活動をしている方々と情報交換ができました。

これからも、こうした横のつながりを大切にしてお互いに学びあうと共に、保育者を養成する大学の子育て支援活動として、今後、どんな特色をだし、どんな子育て支援をしていくか、検討していきたいと思います。

施設面では、交流会室にトイレがないため図書館まで走り、子どもも大人も不自由しました。これも早急に解決したい問題です。また、もっとたくさんの親子がいつでも気軽に集い、将来、母親になり、保育者になる学生の方々がこうした親子に常に接することができるような、明るくて広い夢のある交流会室の実現を切望しています。

今年度は、専攻科の学生に遊具やおもちゃを作ってもらい、子育て交流会にも部分参加し、子どもといっしょに遊んだり、母親の悩みをじかに聞き、子育て支援について学ぶことができました。また、ゼミの時間に交流会室を訪れたり、使ったりする学生も増えてきました。

将来、保育者になる保育科、保育学部 of 学生にとって、こうした手づくりのおもちゃや遊具に触れ、保育室の環境設定や子育て支援を学ぶ場として、これからもこの交流会室がおおいに活用されることを願っています。



資料1 子育て交流会チラシ

いっしょに

子育てを楽しみましょう

桜花学園大学保育学部 名古屋短期大学保育科
保育子育て研究所 子育て交流会室

☆ 子育て中のお母さん、お父さん ☆

赤ちゃんが泣いて困っていませんか？

いたずらをして困っていませんか？

言うことを聞いてくれなくて困っていませんか？

入園前の乳幼児のお母さん、お父さん、子どもさんと一緒に、是非、大学の子育て支援室においでください。手作りのおもちゃが待っています。

子どもさんの遊ぶ姿を見ながら、親同士の交流をもちましょう。子育ての悩みは、みんな同じです。一緒に考えていきましょう。お待ちしております。

☆ 子育て交流会 ☆

- 対 象 : 入園前の乳幼児の親子
場 所 : 桜花学園大学・名古屋短期大学内
子育て交流会室(図書館北)
豊明市栄町武侍48
実施日 : 5月13日・5月27日・6月17日
6月24日・7月10日・9月9日
10月21日・11月4日・12月9日
1月13日・2月10日・3月9日
時 間 : 午前10時～11時
申し込み : 電話で申し込んでください。
TEL(0562・97・1306 内線330)

資料2 子育て交流会の経過・参加人数・内容

- 4月 8日(火) 付属幼稚園の保護者に「子育て交流会」のチラシ配布。
- 4月22日(火)・24日(木) AM10時～12時 電話で受け付け
- 5月 6日(火) グリーンハイツ内子育て支援室「ミッキー幼児教室」の担当者長野さん、加藤さんに活動内容を聞く。
『緑区子育てマップ』を編集担当した河合穂子さんに、緑区の子育て支援事業の様子を聞き、緑区と豊明市の資料をもらう。
- ※ 5月13日(火) 第1回 保育子育て交流会
子ども 4名(生後7ヶ月～2歳7ヶ月 男2名 女2名)
保護者 4名
おもちゃ、遊具で遊ばせながら、母親の話を聞く。
エプロンシアター「おおきなかぶ」と簡単な手品をする。
- ※ 5月27日(火) 第2回 保育子育て交流会
子ども 16名(生後6ヶ月～2歳8ヶ月 男10名 女7名)
保護者 16名
グリーンハイツの「ミッキー幼児教室」から10名参加。
おもちゃ、遊具で遊ばせながら、母親どうし話し合う。
パネルシアター「カレーライス」をする。
- ※ 6月17日(火) 第3回 保育子育て交流会 10時～11時
子ども 10名(男児3名・女児7名)
保護者 10名
手作りおもちゃ、遊具で遊ぶ
指人形(アヒル)・組み木遊具で「おおきなかぶ」をする。
- ※ 6月24日(火) 第4回 保育子育て交流会 10時～11時
子ども 8名(男児1名・女児7名)
保護者 8名
おもちゃ、遊具で遊ばせながら、母親どうしの自己紹介と話し合い。
絵本「たまご」を読む。手遊び「パン屋さん」「ぞうきん」をする。
- ※ 7月10日(木) 第5回 保育子育て交流会 10時～11時
子ども 17名(男児7名 女10名)
保護者 17名
おもちゃ、遊具で遊ばせながら、母親どうし話し合う。
手品「ウサギ・花」と紙芝居「ごきげんのわるいコックさん」をする。
個別子育て相談 1名 11時～12時
- ※ 9月 9日(火) 第6回 保育子育て交流会 10時～11時
子ども 7名(男児3名 女4名)
保護者 7名
おもちゃ、遊具で遊ばせながら、母親どうし話し合う。
手遊び(パン屋さん)・人形劇(おおかみと7ひきのこやぎ)をする。

- ※ 10月21日(火) 第7回 保育子育て交流会 10時～11時
子ども 14名(男児4名・女児10名)
保護者 13名 他2名
おもちゃ、遊具で遊ばせながら、育児相談をする。
指人形(うさぎ、ダチョウ)遊び
手遊び(パン屋さん、一本橋) ペープサート(コブタヌキツネコ)
交流会終了後、付属幼稚園の園長先生に子育て交流会の経過と今後の協力を依頼する。
- 10月27日(月) 個別育児相談(1名) 10時～12時
- 10月29日(水) 自主保育子育て交流会 10時～11時
子ども 7名(男児4名・女児3名)
保護者 7名
おもちゃや遊具で遊ばせながら母親どうし話し合う。
- 11月 1日(土) 電話による個別育児相談(1名) 20時～21時
- ※ 11月 4日(火) 第8回 保育子育て交流会 10時～11時
子ども 3名(男0名・女3名)
保護者 4名
手作りおもちゃ、遊具で遊ぶ
絵本の読み聞かせについての相談に応じる。
絵本『てんてんてん』『ごあいさつ』『たまごのあかちゃん』
- ※ 12月 9日(火) 第9回 保育子育て交流会 10時～11時
子ども 11名(男2名・女9名)
保護者 12名
手遊び(頭・肩・膝ポン) 組み木「てぶくろ」絵本『てぶくろ』
絵本の読み聞かせについて話す。
- ※ 1月13日(火) 第10回 保育子育て交流会 10時～11時
子ども 11名(男4名・女7名)
保護者 11名
エプロンシアター(3びきのやぎのがらがらどん)
手品(キリンの首・不思議な帽子)
- ※ 2月10日(火) 第11回 保育子育て交流会 10時～11時
子ども 17名(男5名・女12名)
保護者 17名
手作りおもちゃ、遊具で遊ばせながら母親どうし話し合う。
エプロンシアター(三匹のこぶた)
製作(割り箸を使ったおもちゃ)
- ※ 3月 9日(火) 第12回 保育子育て交流会予定 10時～11時
子ども 13名(男5名・女8名)
保護者 15名
手作りおもちゃ、遊具で遊ばせながら母親どうし話し合う。
手遊び(目の窓開けろ)
製作(色紙のヘリコプター)

資料3 交流会 出席カード

200 年 月 日

桜花学園大学・名古屋短期大学 子育て交流会室

乳幼児氏名

生年月日

年

月

日

保護者名

住 所

電 話

☆ 子育てに悩んでいること、困っていることなど なんでもお書きください。 ☆

☆ 今日、参加されていかがでしたか？ 感想をお書きください。 ☆

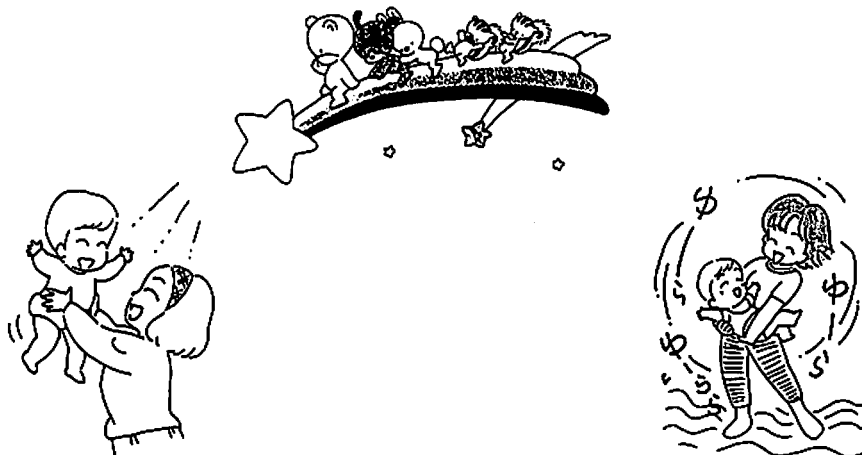


資料4 子育てに悩んでいること、困っていることなど なんでもお書きください。

- ・ 最近「ダメ」「○○じゃない」等否定的な言葉が多いのが自分でも気になっています。
- ・ 兄弟関係がむずかしく、どうとりもったらいいのか悩んでいます。
- ・ 反抗期でなんでも「イヤイヤ」と言い、その対応にイライラしています。
- ・ とにかくマイペースで、私の思いどおりに動いてくれません。
- ・ 友だちの持っているものを取りあげたり、気にいらないとたたいたり、かみついたり押したり攻撃的でハラハラしどおしで困ってしまうし、疲れてしまいます。
- ・ 近所に同じ年くらいの子がいないし、子どもどうし遊んでくれません。
- ・ 最近、母親の姿がしばらく見えないと、とてつもない声をあげて泣き続けトイレにもゆっくりいけません。ほんの少しでもいい、私の時間がほしい。(生後7ヶ月)
- ・ 落ち着きがなく、特にごはんの時よく動きまわり困っています。
- ・ 好き嫌が多く、便秘なので、食事の献立に悩んでいます。
- ・ ほかの子と比べて言葉が遅いように思え心配です。
- ・ 環境に慣れるまで時間がかかるタイプなので、長い目で見られるよう努力していますが、私のそばからなかなか離れられません。4月から集団生活ができるでしょうか。
- ・ 指しゃぶりばかりしていて、夜眠るときも、お昼寝のときも指をしゃぶらないと眠れないので困っています。このまま放っておいて大丈夫でしょうか。
- ・ 自分の思い通りにいかないと、すぐへりをまげすねてしまいます。
- ・ トイレトレーニングが思うようにいかず悩んでいます。
- ・ 下の子より、上の子の不登園のことがとにかく気になり心配です。
- ・ 上の子がなかなか友だちができず、いつも一人でポツンと保育室にたたずんでいて、このままでは、不登校になるのではないかと思うと胸がしめつけられそうです。
- ・ 第1子は、親も子どもも初めてのことばかり、なにもかも不安で心配です。

資料5 今日、参加されていかがでしたか？ 感想をお書きください。

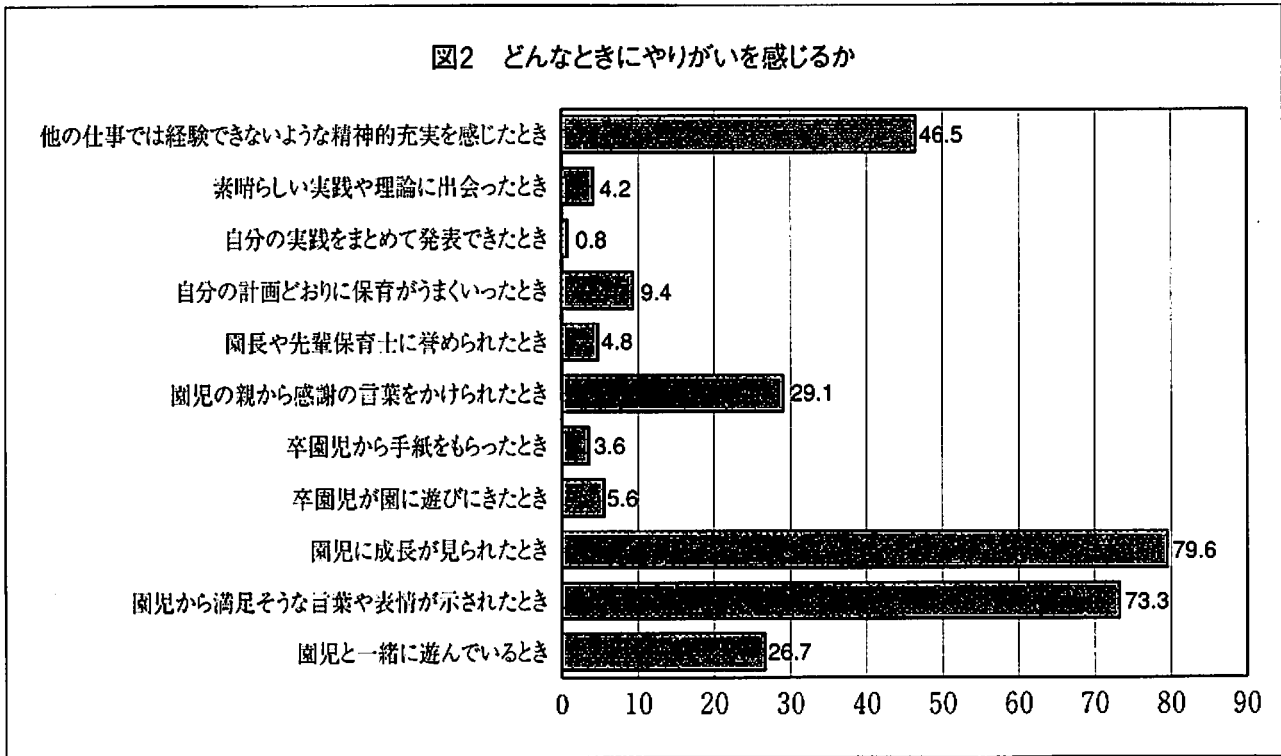
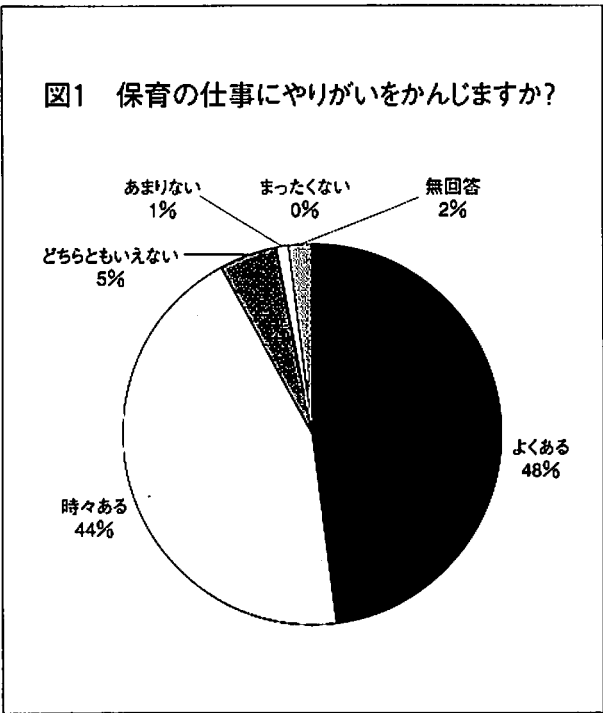
- ・ 近くに友だちがなく、同世代の子どもとのかかわりがなかったので、こちらで、思う存分遊べて良かったです。
- ・ 学生さんの手作りのおもちゃに感動しました。
- ・ 牛乳パックのアイデアにびっくりしました。
- ・ おもちゃは、私も作ってみたいと思うほどすてきでした。
- ・ 家にはないおもちゃがたくさんあって楽しかったです。
- ・ 改めて、手作りの良さを実感しました。
- ・ 親子共々楽しく過ごせました。
- ・ とても楽しいお部屋で、子どもより親の方が楽しんでしまいました。
- ・ ただ遊ぶだけでなく、先生が見せてくれた人形劇やパネルシアターに子どもも私もくぎづけになりました。
- ・ 先生がくださった手遊びや手品を家でやってみたら、家じゅうのみんなが大喜びしました。
- ・ 親子共々、ここでお友達が出来ました。
- ・ 先生に相談できたり、励ましていただいて、元気ができました。
- ・ この交流会室のアットホームな感じがいいです。
- ・ 子どもたちの遊んでいる姿や笑顔を見て勇気づけられました。
- ・ 1時間は、あっという間に過ぎてしまいます。もう少し長いとうれしいです。
- ・ もっと回数を増やしてほしいです。
- ・ 週1回あるとうれしいです。
- ・ 子連れですが、なにかできることがあったらお手伝いします。
- ・ 会の名前をつけたらもっと親しみやすいと思います。『さくらんぼクラブ』なんて、どうでしょう。みんなで決めませんか？



新人保育者への支援と養成校の課題 保育セミナー実施の試み

田中義和

毎年多くの学生が保育者養成校に入学し、卒業後保育の現場に就職していく。職場で新人保育者として失敗をくりかえしながらも、保育者としての仕事に手ごたえを感じ、この仕事を選んでよかったという声を多くの卒業生が寄せてくれる。全国保育士養成協議会の卒業後2年目と6年目の保育士を対象にした調査でも、多くの卒業生が保育の仕事にやりがいを感じている。やりがいがあると「おおいに思う」と「やや思う」を合わせれば、90%以上の卒業生がやりがいを感じている(図1)。「どんなときにやりがいを感じるか」の質問に、「園児に成長が見られたとき」「園児から満足そうな言葉や表情が見られたとき」など、子どもとの関わりに多くの卒業生がやりがいを感じていることがわかる(図2)。



これは卒業後に母校を訪ねてくれる卒業生と接している、私たち養成校の教員の実感でもある。卒業後1、2ヶ月後に、卒業生から来るメールにも保育者の仕事につけた喜びを知らせてくれるメールも多い。そのうちのいくつかを紹介しておきたい。

「子どもたちはほんとにかわいい(*^_^*)最近「せんせい」って呼んでくれてるような気がします。役所の指導保育士さんが、初めの日に「子どもは笑顔には笑顔で返してくれますよ。」と言っていたのですが、本当にそうですね。こっちに来てほしいときとか笑顔で両手を広げて名前を呼ぶとかわい笑顔で走って飛びついてくれます☆まじ最高です(T_T)それに救われて頑張ってます!」(1歳児クラス担当)

「毎日元気に過ごしてます!0,1才児の担任を6年目の先生と一緒に受け持ってます!乳児めっちゃかわいいです☆保育士バカになってます(笑)けど一人一人の記録があるので大変ですf^_^0才の双子ちゃんと1才児10人です!「ママー」って呼ぶ子がいるので、「はあい」って返してます(笑)ドジを連発していますが毎日ほんと楽しいです!充実感いっぱい☆子どもたちの、つぶやきや行動に大笑いしてる日々です☆」

「私は2日に入園式があつて、次の日には給食が始まり、昨日はお花見会があつて、初めてのことで、毎日がいっぱいいっぱいです。来週からは、お昼寝も始まって一日保育になるので、どうなるんだろって感じです。でも、先生たちはほんといい人たちばかりなので、いろいろ教えてもらえます。子どもは、ほんとにかわいすぎです。「ゆちこ(ゆきこ)先生」って言われるたびに、うれしさにひたってます。やっぱうれしいですね☆たまに真剣に「はなこ先生、はなこ先生」って呼んでる子どももいて、誰だよ! (笑)っていう時もあるけど、それもまたかわいいです」(3歳児クラス担当)

しかし、卒業生たちが同時に様々な困難に直面していることも事実である。先の全国保育士養成協議会の調査でも「やめたいと思うときがあるか」の質問に三分の二の卒業生が、「よくある」「ときどきある」と答えている。また、「どんなときにやめたいか」の質問に「園や施設の方針に疑問を感じたとき」「職場内の人間関係が嫌になったとき」を50%以上があげている。また、就労時間の長さ、仕事量の多さなどの労働条件の悪さも30%から40%あげられている。今日の若者の雇用一般に指摘されることでもあるが、卒業後せっかく就職した園をやめていく例も少数とは言え見られる。しかし、一度やめた学生でも、保育職への復帰の意欲は高く、全国保育士養成協議会の調査でも、64%が「また働きたい」と回答している。このように保育士の仕事はさまざまに困難を抱えつつも、仕事としては非常に魅力的でやりがいのある仕事として卒業生たちに評価されてきたといえよう。

しかし、今日、養成校を卒業し現場に出ていった卒業生たちは、以前にましてさまざまな困難に直面するようになって来ている。比較的条件が恵まれていると考えられていた公立の保育園や幼稚園に就職した卒業生の中にも、卒業後数ヶ月もしないうちにやめるものも、ごく少数とはいえ出て来ている。また、やめるまでには至らないもの、職場でさまざまな困難を抱えている卒業生も少なくない。亀谷(2003)は、今日の新任保育者が遭遇する問題を四つのレベルであげている。①自身の保育者としての経験の浅さ来る未熟性 ②近年増えつつある扱いにくい子どもなどがクラスにいる ③子どもだけでなく、保護者への支援、虐待家庭や生活困難家庭への対応 ④定員過剰や非常勤職員の増加などの職場の労働条件の悪化。この四つが場合によっては、幾重にも重なって新任保育者にのしかかってくることになる。

①は、いつの時代の新任保育者もぶつかる問題である。短大2年間で10週間の保育・教育実習を経験していても、保育の現場に出ていけば毎日が新しい体験ばかりで、最初は思うように保育が進まないのが実態であろう。②③の問題は、保育の現代的課題と関わって、ベテラン保育者でも対処が困難な問題である。とくに近年は子育て支援が保育者の仕事として位置づけが増大してきている。しかし、短大などの養成校を卒業したばかりの若い保育者にとって、保護者との対応は子どもの保育以上に難易度の高い課題である。

そして加用(2003)も指摘しているように、保育の現場では、今、若い新任保育者を育てていくゆとりが失われて来ている。それが困難を倍加させているように思われる。長時間保育・延長保育が広がる中で交替勤務が複雑化し、保育の打ち合わせや職員会議をする時間を持つのが困難な状況が広がっている。その中で若い保育者が抱えている悩みや困難を、ベテラン保育者がじっくりと聞いて相談にのる機会が持ちにくくなっており、若い保育者が職場の中で孤立感を深めていく原因にもなっている。

また、臨時職員の増加が保育の現場でも大きな問題になってきている。保育の分野でも民営化が進み、一面的な経済効率の重視が進みつつある。子育て支援などの新しい保育ニーズへの対応や、少子化対策のための定員を超える子どもの入所への対応などにも正規職員の配置ではなく、臨時職員での対応が多くなってきている。保育者の半数以上が臨時職員という園も珍しくない状況である。これは、若手保育者の成長という面から見ても問題が多い。正職員の若手保育者と臨時職員のベテラン保育者が、複数担任でクラスを担当することもあり、保育の中での責任はある立場は正職員である若手保育者が担わざるを得ない立場になることケースも出てきている。

このように若手の保育者をとりまく状況は困難を深めつつあるが、最初にものべたように、多くの卒業生が保育士としての仕事にやりがいを感じており、その仕事を継続することを望んでいる。卒業後、若手保育者の成長を保障していくのは、基本的には保育の現場の課題である。しかし、上に述べたような現場の状況の中では、養成校としても卒後教育として何らかのかたちで若手保育者の成長を支援していく取り組みが求められている。本学では、2003年度に初めて卒業後3年目までの若手保育者を対象に保育セミナーを実施するようになった。以下にその報告と今後の課題についてのべたい。

2003年度 保育セミナー

実施期日は、2003年8月31日。約200名近い参加者があった。アンケートに答えてくれた卒業生は171名であった。プログラムは、午前は開会式、記念講演「保育をもっと楽しく面白く」(講師 谷地元雄一氏)。谷地元氏の記念講演は、氏の主宰する北海道旭川市での学童保育所「ホロホロクラブ」の実践をもとに、保育者も遊び心をもって、子どもたちと生活や遊びを楽しむことの大切さを改めて考えさせる講演で、アンケートの回答でもたいへん好評であった。

表1 記念講演の感想 人数(%)

よかった	156 (94.5)
まあまあ	7 (4.2)
ふつう	2 (1.2)
あまりよくなかった	0 (0.0)
よくなかった	0 (0.0)
合計	165 (100.0)

午後は年齢別と分野別に分かれて分科会形式で実施した。開設分科会と参加人数は以下の表2のとおりであった。

表2 分科会別参加人数(%)

第1分科会 0歳児保育	8 (4.7)
第2分科会 1-2歳児保育	28 (16.4)
第3分科会 3歳児保育	26 (15.2)
第4分科会 4-5歳児保育	19 (11.1)
第5分科会 子どもの遊びと保育	13 (7.6)
第6分科会 食と保育	8 (4.7)
第7分科会 障害のある子どもの保育	12 (7.0)
第8分科会 子どもの音楽表現と保育	18 (10.5)
第9分科会 子どもの造形表現と保育	6 (3.5)
第10分科会 身体づくり・体育と保育	8 (4.7)
第11分科会 子どもの「荒れ」を考える	12 (7.0)
第12分科会 保護者との連携と子育て支援	8 (4.7)
第13分科会 職場のチームワーク	4 (2.3)
合 計	171 (100.0)

分科会については、様々に意見交流ができて、自分を客観的に見つめなおしたり、みんな同じような悩みを抱えていることに共感し、はげまされたとの感想が出されていた。

「久しぶりに友達や先生方に会えるので楽しみに来ました。分科会も職場の現状をみんなで話せて、一人では「こうだ!」と思い込んでいたことも、みなさんの話を聞いたらいろんな考え方をしなくちゃなあと思ってよかったです。」(アンケートの自由記述から 以下同じ)

「いろいろな人の意見や話、大変なのは自分だけじゃないんだと思えることができました。たいへんだと思うことばかりですが、子どもたちが楽しいと思えるような毎日にしていけるようにと思うことができました」

一方で参加人数の多い分科会では、自己紹介で終わってしまったところもあり、内容的にもっと深まりが欲しかったとの指摘も見られた。

今後分科会でとりあげてほしい内容は表3のとおりであった。

表3 分科会でとりあげてほしいこと

人数(%)

保育上の悩みの相談に乗ってもらえる分科会にしてほしい	121 (71.2)
誰かの実践をきちんと報告してもらって、実践に基づいた学習や討論をしたい	45 (26.5)
講義形式で先生の話を知りたい	2 (1.2)
実技を身につける講座がほしい	1 (0.6)
雑談風に何でもしゃべれる場にしてほしい	1 (0.6)
回答者数	165 (100.0)

りであった。

やはり、毎日の保育の中でぶつかっている問題の解決につながる内容が求められていることがわかる。また、実技的な面での研修の要望もたいへん強い。若手保育者の場合、遊びや実技のレパートリーが少なく、現場での研修も十分にあるとは言えず、こうした要望が強く存在している。この問題は単なる技術的な問題ではなく、若手保育者が子どもたちとの関係を作っていくうえでも、保育者自身が楽しく豊かな遊び文化を身につけていることが今日ますます重要になって来ている。

セミナー全体への参加者の満足度は表4に見られるように非常に高いものであった。

表4 今回のセミナーは、全体としていかがでしたか?

人数(%)

満足	121 (71.2)
まあまあ	45 (26.5)
どちらでもない	2 (1.2)
やや不満	1 (0.6)
不満	1 (0.6)
合計	165 (100.0)

下にあげる感想に見られるように、久しぶりに母校に戻ってきて、保育についての学習と同時になつかしい友人や教員との出会いに、刺激と活力をもらい現場に戻っていつている。大阪のいずみ保育園では、仕事に子育てに忙しい母親が、ちょっと甘えて一息つけるような「実家のような保育園」を目指しているというが、私たちの保育セミナーも、保育の仕事に手ごたえを感じながらも、厳しい条件の中で奮闘している卒業生たちにとって、ささやかながらも「実家のような」保育セミナーを提供できたのではないだろうか。

「今回の企画とてもありがたく思いました。久しぶりに学生時代に戻れ、初心を思い出すこともできまし、何より気持ちが楽になりました。この学校の卒業生で本当に良かったです。」

「久しぶりに短大に来てとてもなつかしく思いました。やはり帰ってこれる場所があることはいいですね。とても良かったです。久々にいっぱい笑いました。午前、午後にとともにいろいろな方の意見を聞いて勉強になりました。」

「久しぶりに名短に帰ってきて、また学生のときにどんな保育士になったのかを思い出しました。同じような悩みをもった人に会えたり、いろいろな話を聞けて月曜日からまたがんばれそうです。ありがとうございました。」

「自分だけで抱えていた悩みを友だちに聞いてもらったり、分科会で聞いてもらえたりしてよかったです。少し肩の荷が下りました。また是非参加したいです。年

に3、4回あってもいいなあ。」

「久しぶりに大学に来てとても新鮮な気分になりました。いろいろ悩むことはあるけれど、「おかえり」という言葉に励まされたり、卒業生を大切に考えて下さる気持ちに感激でした。また、同じ保育士として考えや意見を交わせる場に参加したいと思います。とても楽しかったです。ありがとうございます。」

「今年で保育士3年目です。こういう機会がないと名短まで足を運ぶことはないと思うので「3年目まで」だけでなく、これからも参加したいです。久しぶりに来て、改めて自分の母校を誇りに思いました。こんな企画してくれる大学って他にはないですね。ありがとうございました。」

「とても元気になりました。講演、分科会はもちろん楽しかったですが、久しぶりに友だちや先生に会えてうれしかったです。分科会では一年目の人の悩みなどを聞け、新鮮でした。自分の一年目を思い出し、自分も少しは成長していることに気づくことができました。」

今後の課題として、セミナーの内容の充実と同時に、セミナーで把握した卒業生たちの悩みや問題から、私たちの大学での保育者養成教育を再検討していくことも展望していく必要がある。また、園長、主任クラスのベテラン保育者から、若手の保育者がつまみにくい、どう指導したらいいのか戸惑うことが多いとの声も聞かれる。私たち養成校の教員が、若手保育者の研修という面でも積極的に問題提起していくことが必要であろう。

【文 献】

保母養成校卒業生の就業調査－卒業後の仕事に関するアンケート－

保母養成資料集 第9号 1993年 全国保母養成協議会

亀谷和史 「保育の専門性」と養成校の教育課題

『季刊保育問題研究』No.202 2003年8月 新読書社

加用美代子 保育者養成の現状と課題

『季刊保育問題研究』No.202 2003年8月 新読書社

特集「若い保育士さん 悩み教えて!」

『ちいさいなかま』 2003年3月号 草土文化

子育てにおける親の不安・迷い・願い

～連続子育て講座を通して～

左口眞朗

1. 「子育てする気持ちを楽しむための連続講座」とは
2. 母親たちの不安・迷い・願い
3. 子育てのヒントを交流しよう
4. 母親たちが学びたいこと

1. 「子育てする気持ちを楽しむための 連続講座」とは

2003年度保育子育て研究所が取り組んだ3大事業の最後として、2004年2月から3月にかけて5回にわたって実施されたのが、「子育てする気持ちを楽しむための連続講座」である。それら5回の内容は以下のようなものであった。

	月 日	題 目	講 師	参加者数
第1回	2月18日	子どもの育ちを見通そう	神田英雄(保育学部教授)	30名
第2回	2月25日	子どもと楽しむ絵本	宍戸洋子(保育科教授)	33名
第3回	3月 3日	子どもと絵を楽しむ	田中義和(保育学部教授)	33名
第4回	3月10日	子どもの食生活を守る	小川雄二(保育科教授)	28名
第5回	3月17日	みんなで子どもを育てるために	神田英雄(保育学部教授)	31名

対象は、子育て期にある親であるが、特に大学キャンパス内にある付属幼稚園および周辺地域の親の参加を予定した。もとより、保育子育て研究所は、直接子育て事業をすることを目的にしているのではない。むしろ、ともすれば困難になりがちな現代の子育てについて、親たちにどんな支援が必要とされるのか、特に、子育て支援の担い手への支援を目的とする事業を推進したり、子育て支援をめぐる課題を研究することを目的のひとつにしている。

しかし、研究所の事業は、初めの一步を踏み出そうとしているに過ぎない。そのため、保育者養成のキャンパスとして、保育の現場を担う卒業生たち

への支援、付属幼稚園のあるキャンパスとして、その親たちへの子育て支援を、それぞれ切り口にして研究課題をつかんでいこうとしている。

したがって、子育て支援を研究課題にすると、子育てする親の不安や迷いや願いをつかみ、具体的にそれらに応えていくことの重要性もさることながら、子育て支援の理念・目的から方法技術までに

わたって、子育て支援を担う人や組織に対して理論的実践的な指針なり手がかりを提供することである。

研究所が着手した月例の子育て交流会も本来の

趣旨は、その実施そのものが最終的な目的であるというよりも、保育者養成機関として、保育子育ての研究者と保育者をめざす学生たちにとってのもうひとつの現場をキャンパスに「再現」して日常的な研究・実習的な場面を作り出すことである。このことは、単に保育子育ての現場を研究・学習の材料にするという発想にたつてのことではない。そうした面を保育者養成機関として否定することはできないが、それ以上に、キャンパス内でも幼稚園現場があり、保育子育ての現場が日常的にある、そのこと自体をあるべきキャンパスの姿にしたいということである。保育子育てについて研究したり実習したりするとい

うことは、同時に技術や方法レベルの課題というだけでなく、保育子育てへの深い理解と共感を育てるということ、そのことを通じて私たちが相互に新しい人間関係で結ばれるということを目的にしているのである。

これは理想である。そして、事業は着手されただけであり、施設、人的体制など条件整備は十分伴っていない。しかし、可能性はある。今はそういう段階である。

今回のプログラムは、直接研究所の主任研究員を中心に講師を組織した。内容的には、子どもの成長・発達のすじみちに立って子育ての見通しを大きくとらえられるようにしたい、まずは親子で子育てを楽しんでほしい、そのために絵本やお絵かきの魅力や見方を知ってもらおう、そして毎日の食と栄養も親の子育てにおいて重要な位置を占めており、楽しめるものにしよう、こうした思いが5回の講座の流れを作り上げた。ただし、5回目は、当初講師全員と参加者全員が話し合いの機会にして、学んだことやそれぞれの子育てをめぐる思いをさまざまに交流し深め合おうとしたが、条件がそろわず、第1回の補足をかねて講義と質疑の時間に変更した。結果的には、講座の進行中の変更であったが、初回の問題提起に返る形になり、参加者にも好評であった。

以下、連続子育て講座に参加した親たちのアンケートを中心に、親たちの子育てをめぐる不安、迷い、願いを見ていきたい。

2. 母親たちの不安・迷い・願い

子育ての悩みがあるか、そしてそれらが講座を受けて変化したか、との問いに関して、まず次のような悩みや問いが寄せられた。

- ①「自分は子どもを叱り過ぎていないか」
- ②「たいていの子どもたちにあてはまることがわが子にはあてはまらない」

- ③「子どもがご飯を食べてくれない。子どもの欲しがるものを欲しがるままに与えてしまっている」
- ④「保育園や学童保育の先生から、子育てにけじめがない、とか、そんな親とは思わなかった、などと言われるたび、悩み、子どもに向かって鬼ババになってしまう」
- ⑤「一人遊びが好きな子どもだが、友だちと遊んでほしい思いから、ついほかの子と遊んだら、とせっかちに声をかけてしまう」
- ⑥「イライラすると子どもを責める親になっている」
- ⑦「親の思いがうまく伝わらないとき、叱っているのか怒っているのか、自分で分からなくなる」
- ⑧「上の子は6歳で静かにしていられるのに、下の子はじっとしていられない。この違いはなんなのだろう」
- ⑨「一人っ子のため、親の目が行き届きすぎて、のびのびとさせていないのではないか」
- ⑩「5歳の子は何かやりだしても途中で投げ出してしまい、説得しきれない。これでは本人が努力することを学べないのではないか」
- ⑪「今4歳の子どもだが、父親ともっと仲良くさせたいがどうしたらよいのだろうか」
- ⑫「年の離れた姉妹だが、仲が悪くて困っている」
- ⑬「ゲーム脳の話聞くが、気になる」
- ⑭「自分がイライラしていると子どもを必要以上に叱ってしまっている」

子育てに即効薬はないと言われるが、実に簡単明瞭なノウハウが不安や迷いを吹っ切ることになることもある。話を聞いてあげるだけで不安が解消できたりする経験談もよく聞くところである。それは、いずれも同じ状況にある他者との共感関係を見出したり、子育ての先輩(卒業した人)のことに安心感を覚えたりすることである。今回の受講者たちにとっては、少しまとまった子育ての見通しについて概

観できたことや、具体的な場面に基づく子どもとのかかわり方の具体例をいろいろ示唆されたことが、いささかなりとも不安や悩みを軽くするきっかけとなったと思われる。

ここにあるのは、自分だけでない不安を抱えた仲間気付くこと、子育ての先輩や大先輩の経験を経て自信や落ち着きに満ちた態度に勇気づけられること、そして客観的な学習の機会を通して、子育てというとなみの客観化・相対化が母親自身のなかで行われることによってわが子にほどよい距離感をもってかかわっていけるようになること、などのある種の法則的なものではないだろうか。法則的という言葉とやや誤解を招きかねない表現であろう。また、たとえ法則的なものをつかんだとしても、子育ては実はつねに試行錯誤で進んでいくものである。そのこと自体をわがこととしたとき、本当にゆったりした子育てに近づけるといえるだろうか。

では、上記のように、不安や迷いを抱いていた親たちは、講座を受けてどう受け止めるようになっただろうか。具体的には以下のような声となって現われた。

- ① ‘「とにかく笑顔で接することと聞いて、実践してみたい」
- ③ ‘「やはり子どもが欲しがるとはではなく、バランスのよい食事、野菜の献立、歯ごたえのある食事をこころがけたい」
- ⑤ ‘「講座を受けて、一人で楽しんで遊んでいる姿もだいじだと知り、反省、反省です」
- ⑧ ‘「おとなしいイコール大人しい、と教えていただいて、ハッとしました」
- ⑭ ‘「講座を受け、じっくり話を聞いたことで、私のストレスも解消されたようだ。子どもに対してもじっくり話を聞いてあげたり、いっしょに遊ぶことができるのも今だけの楽しみと思えるようになった」

このアンケートの問いは、第4回から第5回にかけて実施したものであり、講座の始めと終わりに子育てする気持ちをたずねて比較しようとするものではないため、十分意識の変化を辿れるものとはいえない。いろいろな悩みや不安を上げていても、講座を受けてどの程度軽くなったのか、解消されたのか、をこの問いの回答からつかむのは無理があるといえよう。しかし、一部とはいえ、講座の必ずしも軽くない効果もまた認められるのではないだろうか。

講座を受けての総合的な自由記述を末尾に掲載しておいた。そこでの声は、28名中28名が5段階評価で「とてもよかった」「よかった」としている。そこでの記述のなかに不安解消の声がさまざまに聞こえてくるのである。

3. 子育てのヒントを交流しよう

子育ての気持ちを軽くするため、あるいは、子育ての意識を深くつかむため、子育てのヒントを出してもらった。そこにも不安や悩みを反転させる母親たちの思いが込められているようだ。

『「適当』『まあまあこれでいいや』という言葉をつねに頭にいれておくこと』

「お母さんが好きなことをしてイキイキと笑顔で毎日を過ごすことが大切だと思う。『〇〇さんのお母さん』でなく、『△△ちゃんのママ』でもない、私自身の時間をもつように心がけている」

『「愛情」のひとことに尽きますね』

「相手は子どもながら、人として『私があの子だったらどう思う?』等、子どもの立場になるべく立って、『こんな言われ方イヤだなあ』『こんなことはうれしい』と考えるようにすると、決定的致命的な過ちはせずにいられるような気がします。あとは、『げ!』と思うことがあっても、『死にゃあせん』と思えるかどうか、厳しくしつつこく言うかどうかの

判断基準としています。そうすれば、それほど相手のことをしからないですみます」

「家事をさばります。一日の家事の一部(掃除や買い物など)を減らすだけで、気持ちに余裕が持て、楽になります」

「イライラ感じたら、大きな声で歌を歌うと、気持ちの切り替えができるようになりました。お父さんとお母さんがニコニコ笑ってる、の歌はとっても良い」

「なるべく歌ったり踊ったり(デタラメな)して、なんか生きてるって楽しいな～を演出しています」

「家の中にいるとつい叱ってしまうことが多くあるので、できるだけ外へ出るようにしています(公園や友だちの家など)」

「散歩、外に出ること。いろいろな人に声をかけられて気分が変わる。(子育てには)今しか楽しめない良さがある」

「入園前は、サークルにはいり、公園に出かけたり話すことでした。今は(入園後)、お母さんだけのおしゃべりや買い物もありますが、よその子と遊んだりすることも楽しいです」

「自分だけの時間を少しでも持って、その間に趣味などに集中する」

「自分が子どものころはどうだったかを思い出して、子どもの気持ちを汲むように心がけています」

「ストレスがたまったら、夫や親など頼れる人に子どもを預けて、自分の時間を持つようにしている」

「私も母親勉強中だから、うまくできなくて大丈夫!!」

いつも楽しく気楽に子育てしている方が、案外うまくいくように思います。他人にできて自分にできないことはない自信を持つことです」

すでに子どもが幼稚園生活を始めている参加者が多いためか、そして子育てサークルにかかわったり、同じような子育て期の親同士でインフォーマルな交流をしていたり、ストレスをためたときには親や夫を頼りにしたり、そしてなによりも、子育て講座に足を向けて積極的に学び交流しようという意欲をもった親たちだからこそ、こうした子育てを明るく楽しく軽いものにしようという気持ちが表現されているのではないだろうか。交流の輪を広げることで、子育ての不安がかなり解消される真実性はこうしたところにあるのではないだろうか。ひるがえって、真に孤立した子育てに陥っている母親たちに手の届くサポートを提供するという課題は、この周辺に広がっていることもまた事実である。積極的に学び交流できる人たちが次にまた自分たちの周辺へと新たな子育て交流の輪をつくっていくことが期待される所以である。

4. 母親たちが学びたいこと

講座参加者たちの声から、今後の企画として関心を寄せるものを上げてもらった。16項目に「その他」を加えて問いかけたところ、以下のような回答になった。(全28名。複数回答)

子どもの叱り方 ほめ方	23	子どものしつけ 一般	21	子どもの発達 の みちすじ	12	絵本	12
幼児期の知育	11	園と家庭の関係	11	子どもと食事	10	子どもと テレビ・ゲーム	10
子どもの遊び場	9	子どもの生活 リズム	8	子育て期の 親同士のつながり	7	早期教育	5
人形劇	5	集団保育	4	子育てと 経済問題	3	紙芝居	3

その他として、「子育てがうまくいっていない他の親子の支援、手助けの方法」「どろ団子の作り方」「子ども参加の講座」「子どもの性教育」が記述されている。

これらから、「子どもの叱り方、ほめ方」「子どものしつけ一般」が特に関心が寄せられていることがわかる。これらは、いつの時代にも共通する子育てのメイン・テーマである。3番目に多い「子どもの発達のすじみち」は、より大きなテーマとしては、これから子どもを育てる若い世代に必要な「子育て保育の基礎知識・方法」に属する課題といえる。よりさかのぼって言及すれば、日本の学校教育のなかで、高校家庭科が男女共修になっている今日なお不十分な分野であると予想される。受験教育が優先されがちな高校教育は、すべての若い世代に共通の教養となるべきである。そして、よりリアリティのある学修が求められている。さらに、出産を控えて、若い男女夫婦がともに赤ちゃん講座なり子育ての基礎を必修的に学べるサポート体制が求められよう。何が真の義務教育のなかみとなるべきか、今こそのちと生存の尊さを基調にして再構築される必要があるのではないだろうか。若干横道にそれたかもしれないが、子育て期にともに学びたい内容としては、子ども参加の講座、親子がともに楽しみながら学べる実技的な講座なども有意義な企画となるであろう。

意外と少ないと思われる項目としては、「早期教育」「集団保育」「経済問題」などが上げられる。保育系学生たちの少なくない人たちが、早期教育の限界、弊害に関心を向け、幼児期からの集団保育の意義と方法をまさに学修内容にしているのとは対照的といえるかもしれない。また、おとなの学習の機会としては、子育てと経済問題は頭を痛めている人が多いと思われるが、参加者の階層的特徴(偏り)が背景にあることも考えられる。しかし、ここでは立ち入ることはできない。

最後に、子育て期の親が学ぶ意義を強調しておきたい。参加者の一部からも注文があったように、父親参加の講座があつてよい、あるべきだ、との意見にも注目したい。子どもとともに参加する講座企画も、今回のような託児付きというのではなく、親子同時参加の遊びを中心に組み立てられた講座も今日のニーズが高いと予想される。いずれにせよ、子育て期だから子育てに専念していればよい、とのかつてあった保守的な主張は影を潜めたかと思われるが、なくなったわけではない。しかし、子育てをゆとりをもってゆつたりと行えるようにするためにも、父親たちの労働条件の抜本的改善が不可欠であり、そして母親たちにあつては、ときに、子どもから解放されておとなとして多様に学び交流することも、親子遊びの「学習」機会をもつことも、ともに必要なことなのだと、多くの人が理解し協力するようになることが求められている。それとともに、子育て支援事業も多様なものとなっていくことが必要だろう。

補足資料：子育て講座参加者の感想から

大変期待して臨みましたが、すべての講座において期待以上に内容の濃いもので、また現在の状況にマッチしている為、非常に勉強になりました。まだまだ勉強してみたいという気持ちが強く、今後このような機会があれば是非また参加させていただきたいです。また子供を預かっていただけたので、母子ともに素晴らしいリフレッシュになりました。ありがとうございました。

子育てをしていて悩んだり落ち込んだりしてしまいがちな事を、本当に楽にしてくれる楽しい講座でした。

子供が生意気なことを言うとなんかガミガミ言ってしまうと、笑顔が少なくなってしまうのですが、気をつけなくてはと講座を聞いて思うのですが、子供がやさしく言ってくれないとやっぱりダメで、私の方が子供なのですね！頑張って笑顔をたくさんこれから子供に上げなければと思いました。

なかなかできないとは思いますが、「笑顔で接すること」ができれば…と思っています。子育てのヒントがいろいろあり、本当に参加できてよかったと思っています。次の機会も是非参加させていただきたいです。

子育てに関する講座は、今回が2回目です。なるほどと思うところがいっぱい、とても参考になります。先生たちの話し方がとても上手で、あっという間に時間が過ぎてしまいました。もっと聞きたいと思っています。

自分の子育てはすでに思春期に入り、毎日親として葛藤の日々です。振り返って、自分の子の幼児期の子育てを反省することばかりです。子育て中のお母さんたちからよく、発達のこと、最近の事件のことを聞かれるので、是非先生のお話を伝えていきたいと思っています。

久しぶりに講義を受けて、とても楽しかったし、「こどもって、こんなふうなんだな」ということが改めて感じられて良かったです。子育てで煮詰まったりしていても、こういう場で楽しく他の方と交流し、子育てを共感できると心が軽くなる気がします。

普段聞くことのない内容を聞く事ができ、とても勉強になりました。ただ私は子育ての参考に…という気持ちより勉強しに…学びに!という気持ちで参加させていただいたので、参加者のおしゃべりの多さ、また託児があるにもかかわらず利用せず(どうして?と思いました)、子供の声や泣き声等はうるさく思いました。その対応をしてほしかったです。

自分自身の子育てが間違っているとは思っていませんでしたが、「本当にこれでいいのかな～」と思う部分が多少ありました。今回色々な先生方のお話を聞いて、「それでいいんだよ」とOKをもらったような気がします。子供にも心穏やかに接することができるようになり、夫から、「最近やさしいね」と言われました。

講座を聞き終えると、今一度自分と子供とのかかわりを振り返る時間が持てました。そしてたくさん子供と話したくなりました。

小さい時は好き嫌いが激しかったのが、小学生になってほぼ食べれるようになった理由がよく理解できました。神田先生の話は気持ちが楽になるので何回でも聞きたいと思います。絵本も絵(3歳の子供の絵を見て変化を楽しんでいます)も知らないことがたくさんあって、楽しかったです。本屋さんの講座は聞いたことがあったのですが、絵本はよい・楽しいというメッセージのみの事が多いので、今回は絵本を子供と楽しめそうです。

泥団子(光る)本当に光ってて、感動しました。うちの子はもう5歳・7歳で、ちょっと小さい子(2~3歳)のお話重視だったので、もう少し大きい年齢の子の話も詳しく聞きたかったです。でもでももっと楽に、育児していこうと思いました。(ポイントは押さえて)

育児は結局自分の体験に基づいて行いがちです。でもそれが果たして正しいのかどうか、照らし合わせる基準がわからず悩む事が多かったのですが、今回色々なお話をうかがえて「ちょっとした心がけ」「少し待つ」といった、「なんだかメチャクチャ大変な事でもなく、何とかやれそう」と思えるヒントをたくさん授けていただけ、少し気が楽になりました。

子育てはやり直しができないので、今回講座を通していろんな事を学ぶ事ができ、とても役立ちました。ありがとうございます。せっかく素晴らしい先生がたくさんいるので、短大内にある幼稚園と何らかの形でかわりが持てたらどんなにいいかと思いました。*子供が園に通っているの。

第一回の講座で神田教授も子育てでイライラしたし、後で何であんな事を言ってしまったんだろうと思った事がある、とおっしゃっていました。その時思わず涙が出てしまいました。今までそんな自分を責めてばかりの繰り返しだったのです。自分だけではなかったんだと肩の荷が下りました。いつもニコニコ笑っていればよい事がとても大切だと感じました。

子育てについて色々な角度から語っていただけたことがよかったです。一口に子育てと言っても、ありとあらゆる事が生活の中に絡み合って子育てがあるので、何回かに分けて講座(各講座)があることで、子供も一つの枠にはめて考えずにすみ、頭でっかちにならずにすんだ気がします。ただ、こんなにも素晴らしい先生方がいらっしゃることを今まで知らなかったことが残念でした。

各講座を聞く度に、耳の痛いことが多かったです。反省することばかりでした。

笑顔の大切さ、幼児期のかかわりの深さが、成人になったときに現れる。食事にしても、大人になってから現れるんだと思った。

つつい毎日毎日の生活の忙しさで見落としがちなことをたくさん教えていただきました。外遊びの大切さやお絵かきさせるコツ、食事の内容だけではなくいかにそのシチュエーションが大切なのかなど。私の持論は「そこに愛はあるかい?」ですが、そこに先生方に教えていただいたコツを生かしていけたらいいなと思います。

いかに今まで子供を叱っていたか、反省しています。先生の言われたことをヒントに実践してみようと思います。

大変参考になりました。事前に申し込みなくても自由に参加できるようにしてほしいです。

とても楽しい講座でした。またあれば、是非受講したいです。年齢的に(子供の)もっと早く聞きたかった話も!(今高学年です) 今からでも修正できる子育て法も、あれば教えて欲しいです。

神田先生の話が聞きたくて受講しました。現在、小2・年長の男の子がいますが、将来の不安を感じながら子育てしているので、3・4年生頃の発達、それまでに大切な事を教えてもらえてよかったです。子育てしていると忘れてしまうので、毎年同じ内容でもいいので、連続してやってほしいです。

いろいろな考え方、見方を教えていただけて、とても為になりました。

託児をしてもらえたので毎回じっくりと話を聞いたことがとてもよかったです。「子育てする気持ちを楽しむため」のタイトルにひかれて受講しましたが、最近私の心の中で子育てに対する気持ちが少し変わってきました。今を大事にしようと思えるようになってきた事と、子供の遊びにもっと参加して一緒に楽しんでしまおうと思えるようになった事です。春休み、子供と何して遊ぼうかとワクワクしています。

つい他の子と比べて悩んでしまう所があったけど、子供の個性を大切に、母としてできるだけ笑顔で、子供と一緒に楽しみたいということを、強く感じた。心に残るとてもいい講座だったので、是非またやって欲しいと思います。ありがとうございました。

5歳と2歳の娘がいます。それぞれ要求してくる事が違い、母親として十分遊んだり話を聞いてあげたいけど、最近「ちょっと待ってね」の連発でした。講座の1回目の、とにかく子供の問いかけに「いいよ、わかった」を使うようになったら、子供もあまり無理を言わなくなり、楽になりました。絵本も大切なんですね。泥んこ遊び、いっぱい遊んでくれてありがとう、という気持ちでいられるようになりました。今回の講座はすべてためになりました。ありがとうございます。

Ⅲ

現代の保育子育て研究の課題をさぐる

幼児期における読み書き習得と「援助」との関係を考える

松本博雄

「読み書き(literacy)能力」とは、幼児期の生活の中ではその必要性が必ずしも明示されてはいないものの、学童期の生活の中では一般に前提とされていることの一つであるといえよう。日本語を母語とする子どもたちは、この「読み書き」の力を、いつ、どのような環境のなかで習得していくのだろうか。

日本において、文字の読み書きに関する組織的・体系的な教育が開始されるのは小学校入学以降のことである。しかしながらほとんどの子どもは、実際には幼児期に読み書きの世界の入り口に足を踏み入れはじめる。すなわち、学童期において必要とされる読み書きの力の基礎は、既に幼児期において、いわば「教えられる」前に身につけられ始めているのである。このことは、読み書き習得の問題を、実践的には幼児期の問題として論じる必要があることを示唆するものだといえるだろう。

われわれは幼児期における読み書き習得の問題をいかなるものとして理解し、それを援助するために、何を、どのように準備していくことができるのだろうか。本稿では、今日の日本における子どもの読み書き習得初期の過程とそれを取りまく状況について、具体的には教育・保育における試みと実際の読み書き習得過程との関係を中心に整理し、これらをふまえた上で残されている研究課題に関して検討を試みる。なお、本稿は、2003年6月14日に筑波大学大塚校舎で行われた日本発達心理学会発達障害分科会2003年6月例会「文字指導の方法論をめぐる」における筆者による報告「『読み学習』をめぐる問題を考える」の内容の一部を加筆し、論文形式に書き改めたものである。

1. 日本語における読み書き習得初期の過程

日本語を母語とする子どもたちは、いつ、どういった過程をたどって読み書きの力を習得していくのだろうか。読み書き能力の発達と教育・保育との関係を考えるにあたり、はじめに読み書き習得初期の過程について、これまでの諸研究から明らかになっていることを簡単に整理してゆきたい。

さて、改めて書くまでもないことだが、通常日本語を表現するのに使われる文字は「ひらがな」「カタカナ」「漢字」の3種類*である。このうち、現在一

般に最も早い段階で習得が開始されるのはひらがな文字の読みだと考えられよう。では、具体的にこれが開始されるのは、おおむねいつごろのことなのだろうか。

たとえば、東京都内の2つの幼稚園に在園している幼児40名について、文字の読み習得のメカニズムや発達における個人差を明らかにすることを目的として、4ヶ月間隔で約2年間の追跡調査を行った天野(1993)では、対象児のうち3歳代に読みの習得が開始された子どもが6割ちかくを占め、4

*実際には他に「ローマ字」もあるが、ここでは扱わないこととする。

歳前半に開始された子どもは2割強、残りの子どもたちは4歳後半ないし5歳に開始されたという結果が報告されている。また、幼児のひらがなの習得状況について、国立国語研究所(1972)による調査と同一の手法を用いて、東京都ならびに愛知県の幼稚園・保育所に在園している3～5歳クラス児1,202名を対象に行われた個別調査(島村・三神, 1994)によれば、読字数が0～4文字の子どもは3歳児クラスで53.9%、4歳児クラスで9.3%という結果であった。

これらが示しているのは、日本語における「読み」の習得が、ほとんどの子どもにとって3歳、もしくは4歳代から開始されるという事実であろう。加えてここで注目しておきたいのは、いずれの研究においても「読み」の指標として扱われているのは、ひらがな文字の読み数(=読字数)と、拗音(「にゃ」など)・促音(「きって」など)・長音(「おかあさん」など)・拗長音(「こんちゅう」など)・助詞(「やまは、たかい」など)の「特殊音節」の読み数だということである。これは、次のような日本語の読み習得の進行順序を反映してのことだと考えられる。日本語の読み習得過程は、「か」を／カ／と読むような、一つ一つの文字の拾い読みから開始された後、次に特殊音節の習得と「単語読み」の段階へ、さらには「文の読み」というレベルへと順次進行する。これについて、順を追ってさらに整理してみたい。

「文字」と「音」の対応関係が明確である日本語の読み習得は、まず「文字の読み」から開始される。これは、文字と音との対応関係が必ずしも規則的ではなく、原則として語単位以上の読みが問題とされる英語等の言語における読み習得過程とは大きく異なるものだといえよう。この「文字の読み」とは、単に表記された文字記号と音とを1対1に、対連合的・機械的に結びつけるような学習の過程ではなく、話しことばから抽象された「音韻」に

対し、文字記号を結びつけていくという学習過程だと考えられる。詳しく説明すると次のようなことである。たとえば／パンダ／という連続音は、／パン／／ダ／と2つに分割することも、／パンダ／のように一つの音として捉えることも可能である。が、かな文字という記号と音とを正しく結びつけるためには、まず読みに先立って、／パンダ／という連続音を、かな文字での表象に適切な単位と一致する／パ／／ン／／ダ／の3つの音韻単位に分割し、さらにはそれぞれの音韻の性質を、たとえばはじめの／パ／は、／ハッパ／のおしまいの／パ／と同じである、というように理解する作業が必要となるのである。かな文字を読む過程において欠かすことのできない、このような言語音についての意識のことは「音韻意識(phonological awareness)」、またそれを支える言語音を分析する能力のことは「音韻分析能力」と呼ばれる。幼児期の読み書き習得過程は漸次的に進行するのではなく、一定の水準まで達するとあとは一気にその習得が進行するという質の学習過程であることが明らかになっているが(天野, 1993)、それは、読みの習得にこのような「音韻分析」と呼ばれる心的作用、ならびにその産物である音韻意識の習得が関わっていることの表れであるといっていよう。また、「書き」に関しては、一般には読みと同時期に、読みの習得に若干遅れつつも習得が開始されていく。つまり、両者の習得はほぼ同時期に開始され、進行していくのである(国立国語研究所, 1972)。

これに引き続いて出現するのは、これまでの「1音1文字」の原則から離れた個々の特殊な表記ルールを習得する過程である「特殊音節の習得」の段階である。たとえば助詞「は」「へ」の読み習得を例にとれば、それは特殊音節として読めない(=清音と同じように読む)段階に始まり、助詞以外の文字通り／は／／へ／と読むべき「は」「へ」もルール

いた園における年間カリキュラムの中では(松本、2003)、読み書きに関する記述は4歳児クラスのそれにおいては特に見られず、5歳になってはじめて「絵本やお話に親しみ面白さを味わう」のような記述が現れ、「日常生活の中で必要な簡単な文字や記号に関心を示し、それらを使ってあそぶ」のような具体的な記述が見られるのは5歳児クラスの最後の時期(1～3月)になってからであった。この例のように、文字に関する事項が実際のカリキュラムに組み込まれ、「教える側」の具体的な意識を伴って環境構成や働きかけがなされるのは、たいていは5歳児(年長)クラス以降のことであると考えられよう。この時期に、実際の読み書きの習得過程はいかに進行しているのであろうか。前節におけるまとめと照らし合わせてみると、この頃は多くの子どもにとって、拾い読みから単語読みへの移行期、もしくはセンテンス読みの開始期に相当すると考えられる。ここから考えると、この時期に保育の場でなされる、読み書きについての「子どもの興味・関心にあわせ働きかける」取り組みは、子どもにとっての「読み習得の入り口」に対応するものというより、小学校におけるそれと同様、既に読み書き習得へ興味を持った子に対し、よりそれを定着させるための働きかけとして機能しているものだということがいえるだろう。

3. 今後の課題 —「読み書き習得の開始期」を いかに捉えるか

これまでに、「読み書き指導」もしくは「文字に関する配慮」といった読み書き習得のための働きかけや援助と、実際の子どもに展開する読み書きの習得過程とを照らし合わせ、両者の関係について検討してきた。この節ではこれらの関係について再度整理したうえで、今後の検討課題について明示し、本稿のまとめとしたい。

具体的な読み書き習得の過程と、それに対する働きかけとしての「教育」や「援助」との関係を整理する中で明らかになったのは、「読み書きの指導」もしくは「文字指導」等のことばで一つに括られる実践活動であっても、実際には子どもの読み書き習得の程度に応じ、「指導」としてなされている具体的活動や、そこにおいて実際に子どもが身につけることが期待される内容が大きく異なっているだろうということであった。本稿において検討された、多くの子どもにとって読みの開始期である3,4歳から、読み書きについての体系的な教育がはじまる小学校1年次以降までの間に、一般に子どもは「読み始め」「書き始め」の段階から「読み理解」の段階までの変化を順次経験していく。これにあわせた「読み書き指導」が単一のものではなく多層性をもつことは、ある意味で当然のことといえよう。そして、このような読み書き習得の過程と働きかけの関係についての整理の結果示唆されたのは、小学校における働きかけのみならず幼稚園・保育所において意識されている働きかけのいずれも、子どもが読み書き習得を開始して以降の時期における働きかけ、すなわち既に一定程度読み書きや文字に興味・関心をもち、習得が既に開始されている子への更なる働きかけであったということである。このことは裏を返せば、「読み書き習得の入り口」すなわち子どもの読みの開始期に対応する、読み書きへの興味・関心を子どもに生起させるよことを意図した「指導」「配慮」「援助」といった特定の働きかけが存在していないということとして理解することができよう。つまり日本語を母語とする子どもにおける読み書き習得は、小学校におけるフォーマルな国語学習に代表されるような「明示的な指導」にも、幼稚園・保育所における環境構成に基づくいわば「見えない働きかけ」である「文字や読み書きへの興味・関心を促す配慮」にも対応せずに開

始されるという意味で、いわば「二重のインフォーマル性」を帯びた学習過程として開始されるということが出来る。多くの子どもにとっての読み書き習得の初期過程は、明示的か暗示的にかにかかわらず、大人による読み書き習得を意識した働きかけとはかかわりなく、意図された「教育」「援助」が実際には介在しないところに開始されるのである。では、読み書き習得の開始期、すなわち子どもが読み書き習得に関心をもち、その習得の世界に入っていくにあたっては、実際にはどのようなことが契機となるのだろうか。最後に「書き」に先行すると考えられる「読み」の側面に絞り、この問題について改めて考えてみたい。

読みが生起していない子どもが、いかなる働きかけのもとで読みを成立させていくかということ、すなわち読み習得の初期と働きかけとの関係に対しては、従来「実際は教えよう・覚えようというはっきりとした意図のないうちに、日常生活や遊びの中に埋め込まれた形で覚えていくというのが一般的な状況である」(高橋, 2002)というような、いわば子どもの自然な興味・関心に基づき生起していく、というタイプの説明がなされてきた。この種の説明において「自然な興味・関心」とされているものは何であろうか。今後具体的に検討する余地のある課題として、読み書き習得のきっかけが、子どもにとっての「仲間」などの人間関係的なものも含めたいかなる環境や活動のもとで、どういった形で生起するのか、具体的にそのような環境や活動をいかに構成していけるのかという問題を挙げることができるだろう。さて、これらの問題を検討するにあたっては、何を手がかりとして考えることができるだろうか。たとえば高橋(1997)は、ことば遊びの一つであるしりとりについて、子どもが遊びへ参加するためには一定の音韻意識を習得していることが必要だということと同時に、音韻意識を十分にも

っていない子どもでも、大人や年長の子どもの援助を通じて遊びに参加することが可能であることを明らかにした。このことから高橋は、子どもたちがこのような遊びへの参加を通じて読み書きの基礎である音韻意識を身につけ、これが結果として読みの習得へとつながっていくのではないかと推測している。読み習得の初期段階において、たとえばこのような形で子どもが他者との協同活動をきっかけにそれに参与していくという可能性は、しりとりなどのことば遊びに限らず、それ以外の活動に関しても十分に考えられることであろう。一方で子どもの読み書きを促す環境については、たとえば保育室にある設備などの量的な文字環境が子どもの読み習得のスコアと関連しないということ、また、同一の文字環境にあってもそこへ参与する度合い、すなわちその子にとっての読み環境の「質」にはかなりの個人差があるだろうことが既に指摘されている(東, 1995; 松本, 2003)。この両者をふまえた上で導き出せるのは、子どもの読み書き習得の開始期の問題について検討するためには、そこにおいて生起する具体的な活動、なかでも大人が無意図的に読みに関して「与えて」いるような当該の子どもを巻き込んで行なっている活動や、子ども同士の「教えあい」「学びあい」の具体的な活動について抽出し、分析していくことが必要だということである。今後はことば遊びに限らず、絵本読みやその他の文字を介しての協同活動を抽出し、子どもがどういった契機でそこへ参与していくのか、また大人の側からみたときに、そのときの契機となるであろう集団および具体的活動を、どう配慮し構成していく必要があるかといった問題等について、引き続き検討していくことが求められるだろう。

【引用文献】

- Akita, K., & Hatano, G. 1999 Learning to read and write in Japanese. In Harris, M., & Hatano, G. (Eds.) Learning to read and write. Cambridge: Cambridge University Press. pp.214-234.
- 天野 清 1993 子どもの読みの習得過程についての発達の・実験的研究. 平成4年度文部省科学研究費一般研究(B)研究成果報告書.
- 東 洋 1995 幼児期における文字の獲得過程とその環境的要因の影響に関する研究. 平成4-6年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書.
- 国立国語研究所 1972 幼児の読み書き能力. 東京書籍.
- 松本博雄 2003 保育所における幼児の文字活動の分析ー日常の保育実践を通じてー 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 730.
- 大藤素子 2002 アメリカの教育改革がキンダーガーテンの文字教育にもたらした影響についてー成熟論からイメージント・リタラシーへの変遷ー. 乳幼児教育学研究, 11, 11-21.
- 柴崎正行 2000 子どもの発達と領域「環境」. 柴崎正行・森上史朗(編) 環境:身近な環境とのかかわりに関する領域(新訂幼児教育法シリーズ) 東京書籍 pp. 33-43.
- 島村直己・三神廣子 1994 幼児のひらがなの取得ー国立国語研究所の1967年の調査との比較を通してー. 教育心理学研究, 42, 70-76.
- 高橋 登 1997 幼児のことば遊びの発達:“しりとり”を可能にする条件の分析. 発達心理学研究, 8, 42-52.
- 高橋 登 2002 会話期と読み書き期の言語発達. 岩立志津夫・小椋たみ子(編) 言語発達とその支援(シリーズ臨床発達心理学④) 第5章(言語発達の概観)3. ミネルヴァ書房 pp. 92-101.
- 内田伸子 1998 読み書き能力の獲得. 内田伸子(編) 言語発達心理学ー読む書く話すの発達(放送大学教材) 放送大学教育振興会 pp.67-84.

学校で「居づらさ」を感じている子ども達への支援 ～環境療法の視点からの取り組み～

森本美絵

はじめに

多くの子ども達が、1日の大半を過ごす学校という場所で、「居づらさ」を感じていることは、平成3年度から調査された不登校児童生徒数の推移から見る事ができる。平成13年度は、過去最多であった。平成14年度に初めて、前年度と比較して8千人減少した。しかし、これらの数値は依然と高く、しかも氷山の一角を示しているに過ぎず、不登校に至らなくとも予備軍とも言える「居づらさ」を感じている生徒の存在は、非常に多いと考えられる。

本稿は、不登校の子どもだけではなく、登校していても「居づらさ」を感じている子ども達にも共通する課題について、その課題解決へとつなげるために必要なコミュニケーションのあり方について述べる。さらに、不登校児童への支援を「環境療法」という枠組みの中で、実践している某市適応指導教室の取り組みを紹介する。教育の現場だけではなく、家庭や地域で子ども達と関わるすべての大人たちが、子ども達との関わりで何を大切にすべきかを考える一助としたい。

なお本稿は、平成15年10月30日に、桜花学園大学保育学部・名古屋短期大学2003年度公開講座「変わりゆく教育のあり方」をテーマとして開催されたうちの、拙者が担当した第4回「教育現場で、生きにくさを訴える子どもたちへの支援～ある適応教室での環境療法の視点からの取り組み～」での講義内容に若干の訂正・加筆をして紹介するものである。

1. 「居づらい」と感じる子ども達に

共通するところ

学校で、「居づらい」と感じている子ども達には、次のような共通するところがある。

- ①自分の気持ち・感情は不明瞭であるが、他人の気持ち・感情は、敏感に察知できる。
- ②他人の機嫌が悪いとき、自分のせいではないかと思う。
- ③自分は、他人からどのように見られているかが常に気にかかる。
- ④他人に弱みを見せたくないと思っている。
- ⑤自分の気持ちを言葉で伝えることが苦手(特にネガティブな気持ち・感情)である。

⑥イライラした時に、黙る、荒々しい動作をする、物にあたる、弱者・動物をいじめる等の態度であらわしてしまう。

⑦その考えに至る経緯は説明せず、突然或いは強制的・押し付けのように結論だけを伝えることが多い。

これらの特徴は、自分の気持ち・感情を抑制したり、抑圧したりすることによって生じ、甘え、依存欲求をはじめとする自己主張、自己表現を禁止したり、無視される環境に適応してきた結果とも言えるのではないかと考える。

私たちは、日常生活を送る中で、さまざまな気持ち・感情が沸き起こる体験をする。

例えば、学校の先生にほめられてうれしかったり、友達と映画を見て楽しかったり、意地悪を言われて悔しかったり、腹が立ったり、自分より優れた人のことをねたましく思ったり、など様々な感情が沸き起こる。心の健康な人は、それらの感情が沸き起こると、それが、不愉快な思い、悪い考え、打ちひしがれた思い等といったネガティブな感情であったとしても、自分の気持ちが何であるかといった正体を明らかにし、それらについて必要に応じて他者に表現できる。自分の気持ち・感情に向き合うことができる人は、様々な場面で、気持ち・感情を大切に扱われた体験が多い人であるように思う。

それでは、気持ち・感情を大切に扱うとはどのようなことであるかを考えるために、「気持ちを大切に扱った例」と「気持ちを大切に扱わなかった例」をあげる。

例1； 幼児：泣きながら帰宅する

母親：「どうしたの」

幼児：泣きながら「〇〇ちゃんが、滑り台の順番ぬかした」（幼稚園で滑り台のすべり順から、友達とけんかになったらしい）

母親：「滑り台すべりたかったね」

幼児：泣きながら「うん」

母親：「悔しかったね」

幼児：「うん」

例2； 幼児：太ももをぼりぼり搔きながら、痒そうにしている

母親：「また、蚊に刺されたの」

幼児：顔をゆがめながら、なおも搔きながら「うん」

母親：「あんたは、よう蚊に好かれるね」

幼児：……

これらは、日常生活の中でよく見られる光景である。例1では、「泣く」という表現方法で訴えた正体不明の感情・気持ちは、「悔しい」という言葉により

明確化され受容されている。例2では、「痒くて不快だ」という感情・気持ちは、全く無視されている。

子ども達が口癖のように吐き出す「むかつく」、「いらつく」という表現は、自分の中に沸き起こっている感情の正体がつかめない状態といえる。正体がつかめなければ、なかなか解決の糸口を見つめることができず、物に当たったり、自分より弱いものをいじめたりして、憂さ晴らしをするという方向にも向かうことになる。子ども達と関わる大人は、その感情を受け止め、時には言葉にして表現することにより、その正体を本人が明らかにできるような関わりも必要である。そもそも「感情」に善悪はなく、感じている気持ち自体は、その人の「ありのままの姿」といえる。そして、自分の気持ち・感じている事を、誰かにわかってもらいたい(受容・共感)という欲求は、人間本来のものと思える。

うれしい、楽しい等のポジティブな気持ちは、他者に表現し、受け入れられると何倍にも膨らむし、悲しい、悔しい、腹立たしい気持ちは、他者に表現し、受け入れられると何分の1かに、縮んでしまうように思う。特に小さい子ども達にとっては、身近な大人が子ども達のいろいろな感情の正体をきちんと受け止めていくことが、自分の気持ちへの尊重、そして、他者の気持ちを尊重できる人へと育てるように思う。

2. 良好な対人関係を結ぶために必要な

コミュニケーション

自分の気持ち・意見を自分自身が尊重し、他者のそれらも尊重し、いわゆる民主的な対人関係を築くためには、先に述べたように、自分の気持ちに気づく、つまり、「もやもや気分」や「むかつく気分」、「落ち込む気分」、「くよくよする気分」の正体をつかむこと(これを黒川は体内コミュニケーションといい、本人が葛藤を起こしている不安な感情の原因

や理由を自覚する、そのような感情が何から生じてきたのかという事を言葉に置き換える事と説明している)である。そして次にそれらの気持ちを相手にわかるような表現方法を使って伝えることが重要になる。この表現方法は多くの場合、コミュニケーションによる。コミュニケーションには、言葉による言語的コミュニケーションと表情、仕草などによる非言語的コミュニケーションがあるが、相手と対面している場合には、両方を使って伝えあっている。このコミュニケーションについては、V. Satiaが次のように分類している。

- ①たてまえコミュニケーション(placating):これは、相手に対して本心は怒っているが、怒りをそのまま表出すると、相手との対立が露わになり、関係が気まずくなることを恐れて、その感情を抑えて、「そうね、そうね」といった表現により、怒っていないふりをして自己防衛をするコミュニケーションである。このような態度は、相手を誤解させるだけであるが、当人は自分の感情を抑圧するために、多くの精神エネルギーを費やすことになり、その結果として無気力になることがある。
- ②非難コミュニケーション(blaming):このコミュニケーションの特徴は、表面的には、あからさまに怒りや不満を出して相手を非難、攻撃する。多くの相手はこの言葉の背後にある感情に気づくことなく、攻撃を避けるためにまともに話し合うことを避けるか、巻き込まれて大げんかになったりする。
- ③偽装コミュニケーション(distracting):このコミュニケーションは、自分の本心をありのまま出すと拒否されたり、自分の立場がなくなったりするので、「それ」とはまったくわからない別の形で表現する。その意図を偽装して反対の表現をする。
- ④理屈屋コミュニケーション(computing):これは心の中で「ある感情」が湧いてくると危険を感じて、

その感情を隠すために、「頭」で何を言うか、どう行動するか「思考」し、感情を抑え理屈で話すコミュニケーションである。理屈を並べ立てることにより、その奥にある感情を相手に悟られないようにする。

これらのいずれも、自分自身の本心(気持ち・感情)を素直に表現しておらず、相手にはその真意ともいえる感情・気持ちが伝わりにくい。しかも、このようなコミュニケーションを用いる人は、いつも自分自身の気持ちが相手に伝わらないこと、つまり相手が自分の気持ちを察してくれない事に不満を持っているものである。

特に小さい子どもたちのコミュニケーションのパターンは、家族の中で身に付くことが多いことから、周囲の大人は真意を隠す複雑なコミュニケーションパターンではなく、正確に相手に伝わるオープンコミュニケーション(open)を心がけるべきである。

3. 某市適応指導教室での取り組み

この章では、先に述べた「居づらい」と感じている子ども達の課題をコミュニケーションの障害と理解し、「環境療法」という枠組みを持って、不登校児童支援に取り組んでいる某市適応指導教室の活動について、若干の事例を交えて紹介する。

「環境療法」とは、生活環境の中で生じる様々な日常の出来事を治療的に活用し、また日常生活上の人間関係を通して治療的に働きかける治療法である。アメリカで施設内処遇の方法として発展し、精神分析的自我心理学と学習理論をその理論的根拠としている。

日本では、情緒障害児短期治療施設において、「総合環境療法(Total Milieu Therapy)」という概念により実践している。ここでは、役割分担と協力関係を技術的に扱い、いろいろな場面や状況を作りだすことで、子ども達の体験の欠乏や過剰を補

充したり中和しようとする、或いは認知・態度・行動を変え、問題解決をはかったり、変容、発達を促している。

この適応指導教室では、子ども達が自分の言葉で自分の気持ちを表現し、お互いの理解を深め、仲間意識を育て、自尊感情を高めていくことを目的として、取り組んでいる。「環境療法」を適応指導教室の活動に生かす上で、次のことに留意している。

- ①生活場面で、子どもの言動を観察し、それに基づいた子どもの行動パターンや心理力動を理解する。(子どもの言動→行動パターン→心理力動の理解)
- ②適応指導教室の年間行事→月間行事→週間行事、そして、日課へと計画的に構造化し、そのプログラムを通して治療的な関わりを行う。
- ③不適応場面において、問題解決療法的な治療介入を行う。
- ④相談部門と連携のもとで、子どもの変化を確認し、さらに援助する。

そして、いろいろな場面を設定し、子ども達を多角的に観察し、彼らの「居づらさ」の背景となる課題を理解し、解決へと向かう関わりを多く持つために、できるだけ多様な活動を計画している。さらに、一人ひとりの課題に応じて、1対1の職員との関わりから、集団の輪を広げたり、親密度の希薄な個人的な遊びから親密度の深まる活動へとつながる取り組みをする。そして、それぞれの活動での不適応場面を課題解決への手がかりとする。

これまで取り組んできた年間行事を紹介すると、野外体験活動(登山、合宿、つり、大風あげなど)、調理実習(菓子作り、カレーライス、サラダ、栗ご飯、お好み焼きなど)、創作活動(看板作り、仮面作り、うちわ作りなど)、スポーツ(トランポリン、ラン

ニング、ソフトバレーボール、卓球、キックベース、跳び箱、フリスビー、バトミントン、サッカー、野球、キャッチボールなど)、農園活動(スイカ、かぼちゃ、トマト、きゅうり、いちご、玉ねぎ、サツマイモ、落花生、大根等、多くの種類を少しずつ植える)、学習活動(1日1時間と自主学習)、社会体験活動(コミュニティへの花壇作り、ごみ拾い、草むしり)、室内活動(TVゲーム、カロム、パソコン、カードゲーム、カラオケ、オセロ、人生ゲームなど)などである。

このような様々な活動の中で、子ども達一人ひとりの課題を発見し、解決へと取り組んだ事例を紹介する。(※本事例は、守秘義務上、実際とは内容を変えています。)

友達が、いじめる、仲間はずれにするので学校に行きたくない、と訴えて入級してきたN君は、小学4年生の男児です。一見したところ、人懐っこく、多弁で明るい印象であり、学習の遅れもない。適応指導教室の日課にも、抵抗なく参加する。一見、何の問題も無さそうなN君ですが、多様なプログラムに参加する中で、多くのことが観察された。それらの一部を紹介すると、次のようである。

学習場面では、他人のちょっとした言動が気に掛り集中できない。指導員が他の子どもと話していると、なかに割り込んで自分の話をしにくる。「ちょっと、待ってね」と言う、「無視された」といって腹をたてる。集団スポーツゲームでは、自分のミスは棚に上げ、仲間のミスを口汚くののしる。工作をした後片付けは、注意されてもやらない。水をこぼしても、自分では拭かない。

このように、集団生活を送る上で多くの不適当な言動が発見されたので、N君の当面の課題を、①他者に対する過敏ともいえる反応(自意識過剰)の軽減、②勝敗に対する強いこだわりの軽減、③社会的ルールを身につける、の3つに整理し、N君

の保護者担当相談員との連絡会を設定し、これら問題の背景についての話し合いをする。そして、相談の方向性と適応指導教室での取り組みについて協力体制をとる。

適応指導教室での取り組みの一つとして、学習時間は、指導員と1対1で関われるように工夫し、指導員を独占できる時間を保障し、集中力をつけさせる。話やゲーム参加への割込み等、社会的なルールの欠如に関しては、指導員だけではなく、事務職員にいたるまで、優しく、しかし毅然とした態度で、N君に関わり、ルールが守られたときには必ず、「ほめる」を徹底する。ゲーム中の他児童への罵りしに関しては、N君が罵倒し始めた時に、指導員は、励まし等の罵倒の代わりに適切なスキルを教え、集団に受け入れられる行動へと変容を促す。このような取り組みの中で、集団生活に適応できるようになった。

この事例は、日々の取り組みのほんの一例であり、その他にも、他児童に「殺すぞ」「死ね」等、暴言を吐く子どももいる。しかし、一人ひとりの課題を明確にし、周囲の大人がそれらへの理解を深め、適切に対応することにより、行動パターンを変容させることは可能であると考えます。

おわりに

いろいろな気持ち・感情は、日常生活の中で、事あるごとに沸き起こるが、それらの気持ち・感情の多くを他者に表現し、受け止めてもらえる人は、随

分とストレスが少なく心の状態の健康な人であると考えられる。しかし、タイトルにあるように「居づらさ」を感じている子ども達は、その多くの気持ち・感情を自分の心の奥底の部屋に閉じ込めて、「もやもや」「いらいら」しているのだと思われる。このような心のあり方は、生まれついたものではなく、いろいろな事情のもとで、そのような心の仕組みを作り上げてしまった、いわば、環境へ適応した結果のように考えられる。このように考えるならば、「もやもや」「いらいら」気分など整理のつかなかった感情を、自分で受け止め、他者に向かって、相手の理解できる表現方法によって伝えていけるような新しい別の環境を用意し、そちらに再度適応してもらえばよいのではと考える。しかし、これまでの自分の心のあり方を変えるのは、とても恐ろしいことで、不安を伴うことから、周囲の大人たちは、その子どもの背景までも理解して、関わっていくことが必要である。仮に、人には、「わたしの心の部屋」というものを持っていて、外とつながる扉を1つ持っていると考えたら、その扉の「取っ手」は、外側ではなく内側についている。イソップの『北風と旅人』のお話ではないが、外がぼかぼかと心地よく、安心・安全な場所であるとわかれば、旅人が、着ていたマントを脱いだように、「そーっと」扉は開かれていくのではないかと。私たち大人には、そのような安心・安全で、気持ちを尊重する環境を用意することが求められていると思うのである。

【主な参考文献】

- Albert E. Trieschman, James K. Whittaker, Larry K. Brendtro (西澤哲(訳))『生活の中の治療』中央法規、1992
 全国情緒障害児短期治療施設協議会 『心をはぐくむⅢ』、2002
 巖谷奈々 『感じない子ども 心を扱えない大人』集英社新書、2001
 黒川昭登 『閉じこもりの原因と治療』岩崎学術出版、1996
 黒川昭登 『不登校カウンセリング』朱鷺書房、1997

資 料

1 保育子育て研究所規程

(準 拠)

第 1 条 名古屋短期大学学則第48条に基づき「保育子育て研究所」(以下、「研究所」という)を置く。

(目 的)

第 2 条 研究所は、保育子育てに関する科学的実践的研究を通じ、保育子育ての充実発展に寄与することを目的とする。

(所掌業務)

第 3 条 研究所は、前条の目的を達成するため、次の業務を行う。

- (1) 保育に関する調査研究
- (2) 保育者養成に関する調査研究
- (3) 子育て支援事業の実施
- (4) 子育て支援に関する調査研究
- (5) 公開講座、研究会などの開催
- (6) 研究所報などの刊行物の発行
- (7) その他目的達成のために必要な事項

(職 員)

第 4 条 研究所に次の職員を置く

所 長	1 名
副 所 長	1 名
主任研究員	2 名
研 究 員	若干名
特別研究員	若干名
事 務 職 員	1 名

（選任・職務）

第 5 条 研究所職員の選任・任期及び業務は、次の各号のとおりとする。

（1）研究所長は、専任教員から教授会の議を経て学長が推薦し、理事長が任命する。

研究所長は研究所を代表するとともに、研究所業務を統括する。

（2）副所長は、専任教員から教授会の議を経て学長が任命する。

副所長は、所長を補佐する。

（3）主任研究員は、専任教員から教授会の議を経て学長が任命する。

主任研究員は、研究所業務及び研究業務を主査する。

（4）研究員は、専任教員から若干名について教授会の議を経て学長が任命する。

研究員は、研究所業務及び研究に従事する。

（5）特別研究員は、学外者から選任し教授会の議を経て学長が任命する。

特別研究員は、特定又は共同の研究に従事する。

（6）事務職員は、理事長が任命し、事務部に属する。

事務職員は、研究所事務に従事する。

（任 期）

第 6 条 研究所職員の任期は次の各号のとおりとする。

（1）研究所長・研究所副所長並びに主任研究員の任期は2年とし、再任を妨げない。

（2）研究所員の任期は1年とする。

（3）特別研究員の任期は委嘱した1年以内とする。

（委 任）

第 7 条 この規程に定めるもののほか、研究所の管理運営に関し必要な事項は別に定める。

付 則

規程は、平成15年4月1日より施行する。

2 保育子育て研究所 2003 年度決算報告

2002年度10月に発足した保育子育て研究所は、半年間の準備期間を経て、2003年度4月から正規に事業を開始した。2003年度予算は、2003年度予算編成に準じて、事務ルートを介して、個々の予算項目名称に異同はあるが、総額171万9699円の法人による承認を得た。以下はその決算状況である。

子育て交流会関係	受付その他事務アルバイト	700×4時間×16日	44,800
夏季保育研究セミナー関係	卒業生への案内状郵送料	80×765人	61,200
	返信用はがき代	50×770人	38,500
	分科会非常勤講師手当て	30,000×1人	33,333
	世話人昼食代	弁当とお茶	23,256
	記念講演講師料	150,000×1人	166,666
連続子育て講座関係	チラシ印刷代	57,000+消費税	59,850
	託児アルバイト	700×3時間×50人	105,000
保育子育て研究所年報関係	印刷製本費	590×800+消費税	495,600
	年報郵送料(切手代)	80×150	12,000
			1,040,205

注1:2002年度中に立てられた子育て支援室運営委員会関係の2003年度予算はこれとは別に執行されたが、ここでは表記されていない。それらは、子育て交流会関係の消耗品費および事務室のパソコンとプリンターとカメラであった。

注2:夏季セミナーの世話人昼食代は当初予算に計上されていなかった。追加措置された。

年度予算に対する執行率は60.5%と、きわめて低いものとなった。この点について若干の補足説明をしておく。

保育子育て研究所は、すでに指摘してきたように、現在の人的物的条件のままに、あらたな組織を設けて出発した。人的には、短大保育科と保育学部専任教員を基礎集団として、そのなかから研究所長と主任研究員を選任し組織された。物的には、2002年度内に、子育て相談室(子育て支援室)が図書館内に施設改造のかたちで整備されていたが、当時は、子育て支援室運営委員会が別に組織されていて、2003年度から統合されるかたちで、研究所の事業に引き継がれた。したがって、研究所固有の施設整備が当初から計画的に進んでいたわけではなかった。名古屋キャンパスとしての保育の教育研究構想が膨らんでいくのは、それからであって、学内に保育研究・教育活動を象徴する施設が独自に存立するには至っていなかったし、現段階でも実現していない。そして、2003年度が始まるとほぼ同時に新しい予算を請求し承認を得たという経緯がある。

こうした事情から、4つの事業を進めていくことを決めていたものの、年度当初からの予算執行にははい

れなかった。子育て交流会の開始自体が、所長が子育て支援室事務室に週1回つめて電話対応するとともに、主任研究員が子育て交流会を運営するという、手ずからの事業であった。したがって、事務アルバイト費の執行は、ずいぶんおくれて11月から初めて着手された。

夏季保育研究セミナーは、保育科卒業生を対象にした企画であり、同窓会の協力を得て、案内状を送付するため、また記念講演企画を立てたため、当然に予算措置が必要であった。しかし、ここでも、専任教員は全員手当てなしの業務として協力している。結果的にみて、最小限の経費に抑えられたといえる。

年度末の連続子育て講座においても同様の特徴が見られる。講師はすべて学内専任教員であり、公開講座のような手当てがついていない。予算上、保育子育て支援講演会講師謝礼が認められていたが、連続子育て講座における執行は認められなかった。託児の体制においても、専任教員が複数運営に協力していただいた。学生の託児アルバイトは採用されたが、専任教員の起用においては結果的にはすべて業務の一環となったわけである。また、学生アルバイトは、保育士資格の取得を予定している保育科学生2年生を採用したが、その単価は700円とされた。大学公開講座における託児アルバイトは、保育士資格と経験を有する者を採用しているため単価がこれより高く設定されている。こうした公開講座との格差がいくつか認められる点は、今後再検討される必要があるだろう。

このように、予算措置において、事務ルートの努力もあり、学園から一定程度研究所の意義を汲んでいただいたことが伺われるとはいえ、さまざまな条件整備がなおきわめて原初的な段階にあり、専任教員の「やりくり」に任せられていることが見えてこよう。2003年度事業は、限定的なものとはいえ、これらをやりとげることができたのは、教職員が研究所の意義と必要を理解し、大学としての今日的使命に根ざして働いているからであり、また多くの「善意」も発揮されていることを無視できない。

最後に、研究所所長の権限に関してふれておく。所長職は、学園による任命職と位置づけられた。手当では支給されない。そこで、認められた予算の範囲内で、所長決済ができるものと考えられるが、実際は、法人の決済権のもとにあり、事務アルバイト料の執行においても法人の指示する手続きにしたがってなされた。学校会計の明朗性、透明性を確保することは当然のことである。しかし、研究所研究員はいずれも大学教員であり、その予算執行においては、自らの研究費と並んで執行するのであり、同時並行的にこうした手続きを重ねていくことはかなりの煩雑さを伴うものであることを指摘しておきたい。専任ないし準専任の職員を欠いていることも原因のひとつといえる。その研究所運営にかかわる職員は教務課が協力して当たるとされた。事業展開の必要に応じて、教務課職員の協力を得たことをここに記しておく。

保育子育て研究所は、現行の体制のままではその事業を拡張することはむずかしい。限界ではないが、これまでのそれぞれの日常業務に加えての新たな事業展開であることは、量的事実である。質的には大いなる意義を有するのであるが、現状に照らして、事業拡大にはいっそうの条件整備が不可欠である。

(文責・左口眞朗)

3 保育子育て研究所の組織体制

2002年10月から開始された保育子育て研究所の活動は、半年の準備、事業計画の検討を経て、2003年度から正式に事業を開始した。前記規程をもとに、2003年度、2004年度は以下のような人的体制で進めている。ただし、この規程は、教授会における承認に際し、暫定規程とされ、研究員の扱い、したがって保育学科と保育科の全専任教員を研究員として位置づけることについて、規程上は若干名とし、事実上は全専任教員として運営されている。2004年度は、所長が保育学部へと異動となったため、短期大学保育科から森本を補充している(規程上は若干名の研究員の一人としての位置づけとなる)。なお、所長は、教授会による選出、承認を経て法人による任命で任期2年である。主任研究員も同じく1期2年の任期である。

2003年度

所長	左口眞朗(名古屋短期大学保育科)
副所長	田中義和(桜花学園大学保育学部)
主任研究員	神田英雄(桜花学園大学保育学部)
同上	宍戸洋子(名古屋短期大学)

2004年度

所長	左口眞朗(桜花学園大学保育学部)
副所長	田中義和(桜花学園大学保育学部)
主任研究員	神田英雄(桜花学園大学保育学部)
同上	宍戸洋子(名古屋短期大学保育科)
研究員	森本美絵(名古屋短期大学保育科)

保育子育て研究所年報 創刊号 執筆者：

左口眞朗 保育子育て研究所第Ⅰ期所長 桜花学園大学保育学部教授

田中義和 保育子育て研究所第Ⅰ期副所長 桜花学園大学保育学部教授

神田英雄 保育子育て研究所第Ⅰ期主任研究員 桜花学園大学保育学部教授

宍戸洋子 保育子育て研究所第Ⅰ期主任研究員 名古屋短期大学教授

松本博雄 名古屋短期大学保育科講師

森本美絵 名古屋短期大学保育科助教授

保育子育て研究所年報 創刊号(2003年度)

発行者	名古屋キャンパス保育子育て研究所
発行年月日	2004年8月10日
住所	470-1193 愛知県豊明市栄町武侍48 名古屋短期大学内
電話	0562-97-1306
FAX	0562-98-1162
印刷	(株)シイエム・シイ



桜花学園名古屋キャンパス
保育子育て研究所

